
桜文論叢

第114巻 2026年2月

日本大学法学部

Nihon University
College of Law

目 次

論 説

疑似法助動詞と法助動詞の意味的相違
—— 文法化の観点から —— 黒滝真理子 1

フランス・ルネサンス期散文物語の「写実」
：ニコラ・ドゥ・トロワの空間描写 石橋 正孝 21

研究ノート

『源経氏歌集』四季部注釈稿（中）承前 鹿野しのぶ 92

疑似法助動詞と法助動詞の意味的相違

—— 文法化の観点から ——

黒 滝 真理子

1. はじめに

いわゆる「文法化」とは内容語（具体的な語彙的意味）から機能語（抽象的な文法的意味）を派生する変化を表す。この変化には構造的な変化と意味的な変化がある。構造的な変化は生成文法的観点から説明されることが多いが、本稿では意味的な変化に焦点をあて、疑似法助動詞を素材として認知言語学的観点から観察してみたい。

英語の法助動詞（モダリティ）には力動的モダリティ・束縛的モダリティ¹・認識的モダリティ²といった下位カテゴリーがあり多義である。たとえば、Traugott, E.C. and Dasher, R.B. (2002)によると、mustは、古英語では「許可」を表す本動詞 *motan* が「義務／強要」の意味を表すようになり、中期英語ではもっぱら「義務／強要」を表す用法の頻度が増し、15世紀には「許可」の意味が失われ、やがて *motan* の過去形から生じた *must* が使われるようになった。「必然性」を表す認識的モダリティは初期近代英語になって勢力を及ぼしていった。*must* をはじめとする英語³の法助動詞には束縛的モダリティから認識的モダリティへの通時的意味変化が見られる。法助動詞は文法化が進んでいるため、現代では語彙的意味よりも文法的機能が際立っている。

では、疑似法助動詞の文法化はどうであろうか。be going to の文法化は、「時空間メタファー」（Sweetser 1990）の観点から説明されることが多かったが、

実はメタファー (metaphor) のみならず、メトニミー (metonymy) も関わっている (Dirven and Pörings 2002; Barnden 2010)。本稿では、疑似法助動詞の文法化の過程で両者がどのように関わってきたのかをみてみたい。それによって、be going to では、なぜ go 以外の移動動詞が使えなかったのかを明らかにする。また、動詞 + to 不定詞が疑似法助動詞として再分析される文法化の過程でメタファーとメトニミーが起こったことで、疑似法助動詞特有の意味が派生したことに触れる。Bolinger (1977) の提唱する “different forms, different meanings (形式が異なれば意味も異なる)” ということばの基本理念によれば、疑似法助動詞 be going to と法助動詞 will の間に意味的相違があることは理にかなっているが、本稿では、be going to になぜ will との意味的相違があるのかについての説明的妥当性を文法化の観点から見出してみたい。さらには、文法化と事態把握の関連性も考察する。

2. モダリティ (法助動詞) のメタファーとメトニミー

まずは、メタファーとメトニミーについて整理しておこう。

メタファーは異なる2つの概念領域から似ている点を見出す機能であり、メトニミーは同じ概念領域内で繋がっているものから、認知的に際立つものを指示する機能をいう。因みに、メタファーの類似性 (similarity) やメトニミーの近接性 (contiguity) という分類は伝統的なものである⁴。

具体的に述べると、メタファーの最も重要な機能はある概念 (起点領域) と他の概念 (目標領域) を対応付けるものである (Lakoff and Johnson 1980)。この対応関係を理解する動機づけは経験基盤主義である。容器に水を入れればその量が増えるといった経験によって生ずるものであるので、“MORE IS UP” のようなメタファーが理解できる。

それに対して、メトニミーの代表的な説明は、Langacker (1993) の参照点能力に基づくもので、認知的な際立ちが高いもの (参照点) から低いもの (ターゲット) へとアクセスするという認知作用の点から説明される。具体的に述べると、空間的繋がりを示す容器と中身の関係 (例えば「鍋を食べる」「やかん

が沸騰した」など), 主従関係 (例えば「赤ずきん」は物語の主人公である少女 (主体) が赤ずきん (従属物) を身に着けていることから, その赤ずきんで少女を指す), 時間的繋がりを示す因果関係 (例えば「唇をかむ」で「悔しい思いをした原因が結果として悔しさをこらえるために唇をかむ」を表す) や継起関係 (例えば「筆をとる / 置く」「口を開く / 閉じる」や「治療する」を表す go to hospital) などがある。

まとめると, メタファーは二つの領域間である概念を別の概念に対応させることで別の概念を理解する認知プロセスであり, 一方, メトニミーは一つの領域内にある概念から他の概念へ心的アクセスを行うことで別の概念を指示する認知プロセスである。

ここで, モダリティにおけるメタファーとメトニミーをみてみよう。

Sweetser (1990) は, モダリティの多義性がメタファー的写像によって起こることを論じている。Sweetser (1990:57-64) は must に関して(1)の例をあげて説明している。(1) a は母の権力が主語 you に対し10時までに帰宅するように強いていることを表し, (1) b は入手できる証拠に基づいて, you が家にいたことを結論付けていることを表す。その際, 話し手は結論に導くような前提となるものを認識していることになる。主語に対する社会的な力や物理的な力が作用する起点領域 a と, 話し手の推論により認識的な力が作用する目標領域 b との間にメタファー的写像関係が成立する。宮下 (2008:620) も「Sweetser (1990) による, メタファーによる変化の説明がある。これは「せねばならない」という社会・物理的な意味領域が, 類似するスキーマを持つ認識的な領域へと転用されたと説明される」と述べている。つまり, 現実世界における外的・社会的・物理的な力が作用する義務的 must から, 話し手の内的な推論世界における心理的な力が作用する認識領域へとメタファー的写像がおこり, 認識的用法の must が生じるというわけである。

(1) a. You must come home by ten. (Mom said so.)

“The direct force (of Mom’s authority) compels you to come home

by ten.”

- b. You must have been home last night.

“The available (direct) evidence compels me to the conclusion that you were home.” (Sweetser 1990:61)

Sweetser (1990:62) は(2)のように will の例もあげている。

- (2) a. John *will* come.

“The present state of affairs will proceed to the future event of John’s arrival.”

- b. (hearing phone ring) That *will* be John.

“My present theory that that is John will proceed to future verification/confirmation.”

(2) a の will は現実世界における力が作用し未来に到着することを表しているが、(2) b では確証や裏付けといった話し手の心理的な力が作用し、現在の推論を表す will へとメタファー的写像が起こっている。

一方、モダリティ表現におけるメトニミーといえば、「今日は暑いですね」のような依頼を表す間接発話行為がある。これは間接的に意図をほのめかすものであるが、そこに語用論的推論が働くと、“Could you open the window? (窓を開けて下さいませんか)” というように依頼へとアクセスできる。その際利用される知識構造は依頼というフレームである (Croft1995)。Croft (1995) はフレームという領域における焦点化の観点からメトニミーを分析している。この場合、暑いから窓を開けるという因果関係が示されているので、時間的なメトニミーといえる。

3. 時空間メタファー

本稿の目的は、疑似法助動詞の文法化のメカニズムについて論じ、疑似法助

動詞 be going to と法助動詞 will の意味的相違を文法化の観点から説明することにある。be going to の文法化は「時空間メタファー」の観点からよく説明されるので、まずは「時空間メタファー」に触れておこう。

Sweetser (1990) は空間表現から時間表現が生じる⁵「時空間メタファー」を唱えた。たとえば、(3) a は空間移動を表しているが、(3) b は approach という移動を表す動詞によって時間の経過が示され時間表現になっている。空間というドメインから時間というドメインへの写像 (mapping) といった「時空間メタファー」が起きている。

- (3) a. We are approaching Kyoto. (まもなく京都です。)
 b. We are approaching Christmas. (もうじきクリスマスだ。)

日本語にも(4)の「ところ」のように「時空間メタファー」の表現はある。

- (4) a. あそこは若いカップルが行くところです。
 (この「ところ」は「場所」に置き換えられる空間表現である。)
 b. ちょうど出かけるところだ。
 (この「ところ」はアスペクト的意味を表す時間表現である。)

Lakoff and Johnson (1999) が「人間はメタファーを介して時間を経験できる」と述べているように、従来の「時空間メタファー」は時間の動きに着目してきた。以下の(5) a もクリスマスが近づいてくるというように、時間が動いている。その一方で、本多 (2011) のいう「移動する話し手からの状況の見え」であるといった捉え方もある。すなわち、認知主体である自己の移動を認知しているということである。時間を経験している主体が関与しているのである。(5) a の時間移動でも実際に移動しているのは自己であり、その移動している自己にクリスマスが近づいていることを表していて、「時間移動」と「自己移動」は一元化できると本多は述べている。これを、本多は「ME 一元論」⁶と称する。

- (5) a. Christmas is approaching. (時間移動)
 Kyoto is approaching. (架空移動) 本多 (2011:41)

「時空間メタファー」のメタファーは概念領域の写像であり、確かに意味拡張といえよう。しかしながら、機能的・語用論的観点から捉えると、意味拡張というよりもむしろ文法化 (grammaticalization)⁷ の観点から説明したほうが妥当である。事実、宮下 (2008:620) も指摘するように、「この (メタファー) 説は起点と目標の意味の類似性を指摘するのみで、どのようにこの変化が起こったのかという具体的なプロセスについては全く問われないという点で」更なる考察が求められるところである。

4. 疑似法助動詞 *be going to* の文法化

「時空間メタファー」の代表例である疑似法助動詞 *be going to* において、空間移動を表す本動詞 *go* が出来事としての時間性を帯びていく文法化の過程をみてみよう。

I'm going to school tomorrow. の *am going* は *go* の進行形で、手はずや準備が整っているから近い将来に起こるであろう近未来を表している。この「行く」を表す *go* の移動動詞に目的を表す *to* 不定詞が後続し、*be going to* というコロケーションで頻繁に使われ般化していくうちに、もともとの「行く」という意味が希薄になり漂白化⁸ されていった。[*be going* + 目的を表す *to* 不定詞] の形式によって、目的は未来に実現するであろうという語用論的推論 (pragmatic inferencing) が生じる。例えば、*I'm going to work harder this year.* は「もっと一生懸命働くために行く」というように、*to* 不定詞の副詞的用法が認知的に際立ち焦点化されメトニミーが働いている。それが「もっと一生懸命働くことを今年こそは実現させよう」といった意味にまで変化する。このように、*be going to* がコロケーションで頻繁に使われ般化していくうちに未来を表す文法マーカの疑似法助動詞が現れる。これは、*be going to* という句の内部構造が組み替えられ、疑似法助動詞として再分析された結果といえ

る。すなわち、*am going* と *to work harder* が一つのコロケーションであったが、やがて *am going to* と *work harder* というように内部構造が変わったのである。再分析は隣接性を想起させる、いわゆるメトニミーである。「もっと一生懸命働く」という出来事が、その直後に起こるであろう出来事、すなわち「今年こそは実現させる」を表すようになる。これはまさに時間的な隣接性に基づくメトニミーである。

従来意味変化の重要なメカニズムとしてメタファーがよく取り上げられてきたが、フレーム意味論の台頭によりメトニミーも注目されてきた。Moore (2006) は、移動には必然的に時間が伴うので、時間概念は起点領域のみならず目標領域にも存在すると述べ、時間メタファーを領域間の写像とは考えず、フレーム間の写像と考えるべきであることを提唱している。因みに、Moore のいうフレームは Fillmore (1982) のいうフレームのことであり、ある概念を理解するうえで前提となる知識構造のことをいう。フレームの観点から考えると、限りなくメトニミーに近いものであるといえよう。

ここで、*be going to* の文法化において、メトニミーとメタファーがどのように関わっているかを、“*I’m going to work harder this year.*” の例文を取り上げ、段階を追ってみたい。

第1段階は文法化する前段階で、*go* の進行形 *be going* によって「行っている」という物理的な移動を表し、*to work harder this year* のように目的用法の *to* 不定詞が後続する。

第2段階では、使用頻度が高まるにつれ般化していき、隣接する語の間で再分析 (reanalysis) が起こり、話し手は目的地へ移動することで目的地自体を示すようになる。隣接する語同士の再分析なので、この過程においてはメトニミーが働いていて、「行く」という動作が目的地や意図を表すようになる。この第2段階から起こる再分析とは語のチャンクが変化することをいう。目的用法の *to* 不定詞の後に *work* のような行為を表す動詞が続いているのが、やがて *like* のような状態を表す動詞をも後続するようになる。たとえば、*I’m going to like him.* は「私は、彼を好きになるために行きつつある」とは解釈

されない。よって、*I'm going/to like him.* のようなチャンクではなく、再分析が起こり未来を標示する文法的要素として定着し *I'm going to/like him.* というチャンクで解釈されるようになる。

第3段階では、「目的地への移動」という概念によって、未来の出来事や意図を示すメタファーが機能する。*I'm going to work harder this year* (今年はもっと一生懸命働くつもりだ) というように、もはや物理的な移動ではなく、未来の行動を意図する。

第4段階では、*going* と *to* が縮約されることで、音韻的にも形式的にも語と語とのつながりが強化され、*be going to* が疑似法助動詞としての地位をより確かなものにしていく。さらに、*work* のような行為の意味特性を持つ動詞しか受け入れてこなかった *be going to* が、類推 (analogy) によって *like* のような状態動詞などの他の動詞も後続するようになり拡大していく。*like* のような抽象的な領域である他の動詞にまで適用範囲が拡大し受け入れられ別の領域へと写像する、いわゆるメタファーが働く。

つまるところ、メトニミーとメタファーのメカニズムが相補的に機能しているのである。このように、物理的移動の意味から、意図や未来の出来事を示す文法マーカーへと変化する過程では、初期段階では再分析とメトニミーが、後期段階では類推とメタファーが機能しているのである。よって、メタファーとメトニミーは相補的な共存関係にある。メタファーはメトニミーに基づき、メタファーの動機づけがメトニミーであるということになろう。疑似法助動詞の文法化においてはメタファーよりもメトニミーの方が認知的基盤にあるといっても過言ではない。

メタファーは異なる領域間の写像を表すのに対し、メトニミーは同一領域内(フレーム)での焦点化・認知的際立ち度の問題である。よって、メトニミーでは起点領域にあったものが保持されるが、メタファーでは起点領域にあったものは消えるといった現象が起こる。上述したように、*be going to* において *go* の移動の意味がかりうじて保持されている点はメトニミーも働いている証左となる。*be going to* の文法化を辿ってみて、メタファーとメトニミーは別々に

機能するのではなく、両者とも経験的基盤に基づき、依存し合いながら機能するものであることがわかる。

よって、文法化を動機づけるものは、メタファーのみならずメトニミーもあるということになる。Heine *et al.* (1991:70-78) も「be going to の文法化はメタファーとメトニミーの相互作用の結果である。文法化の過程で語用論的推論というメトニミーが繰り返され、やがてメタファーによって意味拡張が起こった」と述べている。Hopper and Traugott (1993:87) も “In summary, metonymic and metaphorical inferencing are complementary, not mutually exclusive, processes at the pragmatic level that result from the dual mechanisms of reanalysis linked with the cognitive process of metonymy, and analogy linked with the cognitive process of metaphor.” といって、文法化においてはメトニミーとメタファー両者が相補的に作用していることに言及している。

さらに、文法化の過程で再分析が起こり「行く」という原義が薄れると空間移動の意味が失われる。そのため、もはや動作を表す動詞を後続する必要がなくなり、類推によって be going to は意味の弱化を伴い、like のように状態動詞を含むあらゆる動詞と共起するようになることは上述した。文法化するにつれて後続する動詞が多様になっていく。この現象は、類推によって新たな機能を生み出す「類推拡張」といえる。

ここで特記しておきたいことは、移動の意味は全く消滅されるのではなく、空間移動から時間移動というメタファーが起こり、時間軸上を移動中、移動途中であることを示すので、go の原義がかりうじて保持される、いわゆる「意味の保持化 (persistence)」(Hopper and Traugott 2003:3) の現象がみられる点である。go の原義「行く」が保持されて移動途中という意味になるために、be going to は go 以外の移動を表す動詞 (例えば、be moving to, be coming to, be running to など) に置き替えることができないのである。つまるところ、疑似法助動詞は語彙的要素がまだ色濃く残っていて、法助動詞ほど未来標示の文法的機能が定着していない。まさに文法化の途上過程にあり、語彙的意味と文法

的意味が混在しているというわけである。

5. 文法化がもたらす疑似法助動詞と法助動詞の意味的相違

従来、be going to の文法化は、空間の概念領域から時間の概念領域への変化であり、時間を空間に見立てて捉える、いわゆる「空間から時間へのメタファー」つまり「時空間メタファー」であるといわれてきた。しかしながら、本稿は、be going to の文法化の過程においてはメタファーのみならずメトニミーも重要なメカニズムになっており、メタファーの動機づけがメトニミーであり、両者は相補的な共存関係にあるという立場をとる。

文法化の過程でメトニミーとメタファーが関与している現象は法助動詞 must の疑似法助動詞 have to にもみられる。I have something to read. の have は「～を持っている」という所有を表す本動詞である。これが、再分析により I have to read something. となることで have to が疑似法助動詞化される。have to の文法化の過程では、have の「所有」の意味が中英語期に弱化され、「持っている必要がある」から「義務を負う」(OED 2ed. 1989:125) というようにメトニミー的意味拡張が起こる。これによって、have to がチャンクとなり再分析される。さらに、「持っている」という具体的な概念が「義務を負う」という抽象的な義務感や責任感を表す概念に写像しメタファーが起こり、義務を表す疑似法助動詞の have to になる。主語が物理的に所有するという意味合いが薄れるにつれて、話し手の主観的な所有、すなわち気持ちの持ち様を表す「～に違いない」という推量の意味が生じる。ここでも、be going to と同様、to 不定詞が意味の弱化した本動詞と一体化し、疑似法助動詞としての地位を確立していった過程が垣間見える。また、have to の場合もメトニミーがメタファーの動機づけになっていることがうかがえる。

be going to も have to も主語の物理的移動・所有といった具体的な意味から、話し手の意図や未来の予定や推量を示す文法マーカーへと文法化していく。その過程では、再分析とメトニミーが初期段階で、メタファーが後期段階で重要な役割を果たしているのである。

- (6) a. “The phone is ringing.” “I’ll get it. Maybe it’s Brad.”
 (be going to は前から決めていた意図を表すが, will はその場でなされた決心を表す。)
- b. Is that lightening? I hear thunder. There’s *going to* be a storm.
 (稲妻が鳴っているのが兆候になって, 嵐になりそうだとやっている。)
- (Genius 6th 2023:890)

(6) a の will は発話時にとっさに思いついた意図であり, 発話時以前から予め決定していた意図を表す be going to とは異なる。(6) b の be going to は現在の兆候に基づく話し手の予測を表し, 単なる話し手の判断を表す will とは異なる。

前述したように, be going to は意味変化の過程で, be going という進行形に to 不定詞が後続していたが, 再分析が起こり疑似法助動詞となった。この文法化の過程でメトニミーとメタファー両方が関わっていた。進行形の be going は, 将来の出来事に向かって主語が時間軸上を移動している途中, すなわち移動の始まりと終わり (スタートと到着) を除いた移動 (ある出来事) の途中段階を示している。よって, もうすぐ到着するので, その手はずは整っている状況にあるという「前段階」⁹を暗示している。将来の出来事に向けての主語の有り様も同様で, 発話時以前から「前段階」があるがゆえの予め決定していた意図を表す。

- (7) a. I *have to* shave every morning.
 (会社の規則などからひげを剃る必要がある。)
- b. I *must* shave every morning.
 (毎朝ひげを剃らないといけないことを話し手が自ら必要と感じている。)
- (Genius 6th 2023:1362)

(7) a の have to は会社の規則という外的要因による義務, (7) b の must は話

し手自らの内的要因による義務を表す。have to は文法化の過程で、「を持っている」という具体的な概念が「義務を負う」というように義務感や責任感を表す抽象的な概念へと写像しメタファーが働くことは上述した。「義務を負う」には、話し手の内的な義務感だけではなく外的な義務感までの広範囲な意味を担う。また、have は「自らの領域に置く→所有」という物理的接触を表していたが、それにメトニミーが働くと「物事の関与→他者の関与」を表すようになる。これらは have to の表す義務が外的要因によるものであることを暗示している。

このように、文法化によって、具体的な概念が抽象的な概念に写像する際に特別なニュアンス（兆候や外的要因など）が生じ、再分析により新たな機能的・意味的要素が生まれるのである。will と be going to, must と have to の間に意味的相違があるように、法助動詞と疑似法助動詞間の意味的相違は、[本動詞 + to 不定詞] が疑似法助動詞へと文法化する過程でみられるメトニミーとメタファーというメカニズムによってもたらされることがわかった。

6. 文法化と事態把握

be going to の文法化の過程は、話し手が未来の事態をどのように認知し構造化するかに密接に関わっている。移動動詞 go の「行く」という意味は希薄になるが、移動の意味が全く消滅するわけではなく、go の原義は保持される。go の原義「行く」は「主語が時間軸上を移動している」を表す。元来意志を持った有生名詞の移動を表すので、通常行為を受ける主語には有生名詞がくる。つまり、animate agent が明示される。この go を使った be going to が文法化によって推量を表していく過程で、主語の意志の意味が希薄になり、無生物主語も許容するようになる。要するに、主語の選択制限がなくなっていくのである。人称制限がない現象は客観的把握の傾向が強いことを暗示している。

客観的把握とは「話者は問題の事態の外にあって、傍観者ないし観察者として客観的に事態把握をする—実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、話者は（自分の分身をその事態の中に残したまま）自らはその事態から

抜け出し、事態の外から、傍観者ないし観察者として客観的に（自分の分身を含む）事態を把握する」（池上2011:52）ことをいう。すなわち、認知主体は事態の中に身を置いていても、自己分裂したもう一人の自分が、事態の外に身を置き、観察者・傍観者として客観的に事態を把握し、自らをも言語化する。たとえば、(8)の例文のように、認知主体が自らを客体化させ、他者化するのである¹⁰。

- (8) a. I am sad.
b. You are sad.
c. He is sad

一方、日本語の「時空間メタファー」を表現する移動動詞は多様である。例えば、「間もなくクリスマスだ」の他に「クリスマスがやってきた」「クリスマスが近づいてきた」「クリスマスが迫ってきた」などのように、事態を時間的接近として捉えつつ、状況の推移を表している。第3節でも、時間を空間移動と捉える「時空間メタファー」には時間移動と自己移動があることに触れたが、時間移動も時間を経験する認知主体の自己が動くことを表す。その自己は、主観的把握型の日本語では、移動によって状況の推移・変化を表すことになる。それは、まさに時間に左右される体験的なものである。その際、主体はその状況の中に埋没される。これを主観的把握という。池上（2011）によると、主観的把握とは「話者は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする—実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をする」（池上2011:52）ことである。すなわち、認知主体は事態の中に埋没され、自らの〈見え〉から事態を体験的に捉える。よって、言語化の対象から外れ表現化されない。これを「自己のゼロ化」（池上2000）という。自己が明示化されないので、1人称主語の省略が起りやすく、主語が2人称や3人称の場合は状況の変化や推移を体験的に捉えるかのように伝聞や証拠性の文法マーカーを駆使する。あくまでも傾向差はあるが、日本語はこの主観的把握

が相対的に広範囲で許容される言語であることを池上（2000:278）は示唆する。

主観的把握型の日本語には人称の選択制限がある¹¹。池上（2000:279）は、日本語の表現で〈主観的把握〉が目立つのは感覚・感情表現であると述べ、「感覚や感情といった〈非意図的〉（あるいは〈自発的〉）な営みに関わる主体を特別な形で言語化するということはあるのであるが,,」（池上2000:280）として、以下の例を挙げている。

- (9) (1) a. (私ハ) 寒い。
 b. I am cold.
 c. Mir ist kalt. (=TO ME IS COLD)
- (2) a. ?? アナタハ寒い。
 b. You are cold.
 c. Dir ist kalt. (=TO YOU IS COLD)
- (3) a. ?? 彼 / 彼女ハ寒い。
 b. He/She is cold.
 c. Ihm/Ihr ist kalt. (=TO HIM/HER IS COLD) (池上2000:280)

日本語には人称制限があるから、2人称主語や3人称主語の場合、客観性を帯びるために伝達を表す終助詞や証拠性を表す文法マーカ―を付加する必要がある。一方、1人称の自己は事態に埋没されるから、終助詞を駆使して1人称であることを示そうとする。いわゆる自己性（エゴフォリシティ）の関与を示すのが日本語の特徴である。Tournadre and LaPolla（2014）は、エゴフォリシティの特徴をもつ言語には自己の関与の有無を表示する異なる文法形式があると論じている。証拠性の文法形式もこれに該当すると考えられる。自己性と証拠性の関連性についての詳述は次稿に譲りたい。

7. おわりに

本稿では、疑似法助動詞 be going to や have to のような [動詞 + to 不定詞]

が再分析を経て文法化する過程でメトニミーとメタファー両方のメカニズムが機能していることを論じた。すなわち、be going to も have to も主語の物理的移動・所有といった具体的な意味から、話し手の意図や未来の予定・義務や推量を示す文法マーカーへと文法化していく。その過程では、初期段階で再分析とメトニミー、後期段階ではメタファーが重要な役割を果たしている。従来、意味変化を引き起こすメカニズムとしてメタファーがよく取り上げられてきたが、実は、とりわけ疑似法助動詞の意味変化においてはメトニミーこそが主要なメカニズムであることを述べた。それにより、法助動詞とそれに対応する疑似法助動詞との間で意味的相違が生じる根拠を文法化の観点から説明するに至った。すなわち、文法化の過程で具体的な概念が抽象的な概念に写像する際に再分析が起こり、新たな意味的要素（兆候や外的要因など）を伴う。たとえば、be going to の場合 be going という進行形から文法化していくのであるが、その進行形が担う「前段階」という機能によって、will とは異なる意味内容を示すことになる。法助動詞と疑似法助動詞間の意味的相違は、[本動詞 + to 不定詞] が疑似法助動詞へと文法化する過程でみられるメトニミーとメタファーによってもたらされることがわかった。

さらに、なぜ be going to では go 以外の移動を表す動詞が用いられなかったのか、また、なぜ be coming to で未来を表せなかったのかといった疑問に対し、go が表す移動の意味は全く消滅されるわけではなく、進行形によって時間軸上の移動中、移動途中が示されるので、go の原義がかりうじて保持されるからであることにも触れた。メトニミーでは起点領域にあったものが保持されるが、メタファーでは起点領域にあったものは消える。go の「行く」という語彙的意味の保持化が認められるということはメトニミーが早い段階から機能していることを示している。要は、疑似法助動詞には語彙的要素がまだ色濃く残っており、法助動詞ほど未来標示の文法的機能は定着していないのである。つまり、文法化の発展途上にあり、語彙的意味と文法的意味が混在しているというわけである。

また、メタファーとメトニミーは別々に機能するのではなく、相補的な共存

関係にある。文法化を動機づけるものは、メタファーだけでなくメトニミーでもある。とりわけ疑似法助動詞の文法化において、メタファーの動機づけはメトニミーであり、メタファーよりもメトニミーの方が認知的基盤にあることも本稿で明らかとなった。

文法化によって新たな機能的・意味的要素が生じることから、文法化とは文法の変化にとどまらず文化や社会に適用するための変化でもあるとも考えられる。この点に関する十全なる論究は次稿に譲りたい。

<備考>

本稿および黒滝真理子（2009）『ドイツ語母語話者の言語表現における客観的把握の存否—言語類型論点観点からみた日英独語のモダリティ研究—』（『桜文論叢』第73巻）における分析の多くは、宮下博之氏（2008）の論稿『ドイツ語のような言語ではなぜ認識的意味への意味変化が生じるのか』（『日本認知言語学会論文集』第8巻）の記述を引用し、そこから得られた示唆に依拠している点を付言する。

注

1. 力動的モダリティ（dynamic modality）とは根源的モダリティ（root modality）ともいわれ、通時的にみてモダリティの起源となるもので、文の主語がもつ能力（can）や意志（will）を表す。束縛的モダリティ（deontic modality）とは命題の表す行為の実現に対する文の主語に課せられた義務・許可を表す。両者とも主語志向的（subject-oriented）である（Palmer 2001）。
2. 認識的モダリティ（epistemic modality）とは命題の蓋然性に対する発話時現在の話し手の査定（心的態度）を表す。推測や可能性を示し、話し手志向（speaker-oriented）である（Palmer 2001）。
3. 独語も英語と同様、印欧語の起源を辿るゆえ、「英語の must や can に対応するドイツ語の müssen や können といった法助動詞には、英語と同様に義務的意味から認識的意味への変化が観察される」と宮下（2008:620）は述べている。Gamon（1993）などによると、独語「müssen は、古高ドイツ語期から助動詞として『余地がある、許されている』といった意味で使われていた。晩期古高ドイツ語期になると、しだいに文脈的に『せねばならない』と解釈できるような用例が現れてくる。さらに中高ドイツ語期には、古高ドイツ語以来の許可の意味はまだ見られるものの、『せねば

ならない』の用法がその中心として定着したとされる。そして16世紀からは認識的意味の用法が見られるようになった。以上から müssen の意味は『余地がある』>義務的意味>認識的意味という方向で展開していったことが確認される」(宮下2008:620)。宮下(2008:623)も述べるように、「この類型がどの程度言語の個別性を作り出すのかに寄与している」ので、英語のみならず、「中高ドイツ語の資料に基づく詳細な分析を行い」、印欧語の類型論的特徴を論証していく必要がある。

4. メタファーはある事物の本来の意味と類似している別の事物で捉えるのに対し、メトニミーは本来指し示す事物と隣接する別の事物で捉える。たとえば、「働き手」は「手(hand)」という体の部分で「労働者全体」を指す。

OED 2ed. (1989:398) にはメトニミーの定義として以下のように記されている。

A figure of speech which consists in substituting for the name of a thing the name of an attribute of it or of something closely related.

メトニミーは「言葉のあや」とよくいわれる。対象となるものの名前を使わず、その属性で示すか、あるいは、密接に関連するもので示すからであろう。密接に関連することから「隣接性・近接性」という用語が使われた。一方、メタファーには「類似性」という用語が使われた。

Croft (1995) はフレームという領域における焦点化の観点からメトニミーを分析した。たとえば、「台所を手伝う」「台所が苦しい」「台所を任せる」など台所という場所が料理のフレームとして捉えられている。「手を貸す」というと手は体の一部であるが、体全体を差し出して手助けするというように、部分で全体を指示する。「その寿司屋は美味しい」といったら、「寿司屋」で「寿司のネタ」を表すように、入れ物で中身を示す。これらのメトニミーは空間的な隣接関係であるが、時間的な隣接関係もある。たとえば「手洗いに行く」という時、手を洗うのは事後の行為で、まずトイレに行って、用を足して、手を洗うというような直列的な時間を表すメトニミーである。「袖を濡らす」という古典語も「泣いた」結果として「袖が濡れる」という因果関係が示されているといった意味で時間的なメトニミーの一種である。これらの例のように、そのフレームの中でも知覚的に目立つもの、プロファイルされるもの、参照点として選択されやすい現象、すなわち認知的際立ち(cognitive salience)の高いものが表現される(Langacker1993:199)。

このように、メトニミーが「言葉のあや」とよくいわれるのは、本来の意味と指示している意味のズレがみられるからである。

5. その一方で、時間表現から空間表現が生じるという解釈があっても不思議ではない。事実、「時空間メタファー」説を否定する立場(Traugott and Dasher2002)もある。
6. ME とは moving experience の略語である。
7. 文法化(grammaticalization)とは、内容語(動詞や名詞など語彙的内容を持つ要

素)が機能語(語彙的内容が希薄な助動詞や前置詞・助詞など)へと通時的に変化することをいう(辻編(2002), 231:「文法化」)。文法化には、「意味の漂白(semantic bleaching)」、「文脈の般化(context generalization)」、「脱範疇化(decategorization)」、「音声的縮約(phonetic reduction)」という4つのプロセスが関与している。

8. 「漂白化(bleaching)」(Hopper and Traugott 2003:94-98)とは、文法化の過程のうち、本来の具体的な内容を持つ語彙的意味が抽象化・一般化していく意味変化(辻編 2002:46)を指している。語形の短縮を伴うのが一般的である。文法化の初期段階に「般化」が起こり、その後、「漂白化」が副次的に起こる。
9. 進行形の「前段階」性については、佐藤(2014:101)が「進行形が表す状況には必ず基準時以前の状況(=「前段階」)が認められる」と主張している。発話時以前から顕在する意図や兆候を「前段階」という。
10. 池上(2000:280)にもドイツ語の例が提示されているが、同じ事柄に対して主観的把握／客観的把握という異なる捉え方をするといった事態把握の類型論的特徴は日英語だけではなく、ドイツ語にもみられる。ドイツ語は、英語同様、客観的把握である。

宮下(2008:622)は「(13) a. 私はうれしい。 b. ?彼はうれしい。 c. 彼はうれしがっている・らしい・ようだ」といった感情表現に対し、「(14) a. Ich freue mich. 直訳：私はうれしい。 b. Er freut sich. 直訳：彼はうれしい」とドイツ語の例を挙げ、「ドイツ語では認識的意味を言語化せずに、聞き手がそれを補うことが頻繁に行われる。それに対し日本語は、認識的意味を言語化する傾向のある言語と特徴づけられる。……日本語では3人称の心情について述べる際に証拠的もしくは認識的標識が必要であるが(13c)、このような制限はドイツ語には見られない」と述べている。

11. 本稿は疑似法助動詞の文法化について述べてきたが、日本語の人称代名詞にも文法化現象がみられることに触れておこう。とりわけ、1人称や2人称の代名詞は文法化の起点領域になりやすい。なぜなら、話し手や聞き手は常に発話に関与しており、使用頻度が高いからである。使用頻度が高い語は文法化されやすいのである。一方、3人称代名詞は文法化の目標領域になりやすい。3人称代名詞が定冠詞や指示詞という文法的カテゴリーによって再解釈されることが多いのは、文法化の目標領域にあるからである。金水(2003:39)には「江戸時代以前の資料に現れた「持つ」の主語には無生物が現れることが極めて少ない」という指摘がある。通時的にみても、そもそも3人称を主語にする表現は江戸時代までほとんど存在しなかったわけで、文法化の目標領域にあったと考えられる。人称の文法化の詳細については稿を改めることにしたい。

参考文献

- 池上嘉彦(2000)『「日本語論」への招待』講談社。
 池上嘉彦(2011)「日本語と主観性・主体性」,『ひつじ意味論講座第5巻 主観性と主体性』49-67, ひつじ書房。

- 金水敏 (2003) 「所有表現の歴史的変化」『言語』 32-11,38-44.
- 佐藤健児 (2014) 「進行形の「前段階」性について」『英文学論叢』 62,99-119. 日本大学英文学会.
- 本多啓 (2011) 「時空間メタファーの経験的基盤をめぐって」『神戸外大論叢』 62(2):33-56.
- 宮下博幸 (2008) 「ドイツ語のような言語ではなぜ認識的意味への意味変化が生じるのか」『日本認知言語学会論文集』 第8巻 .620-623. 日本認知言語学会.
- Barnden, J.A. (2010) “Metaphor and Metonymy: Making their Connections more Slippery.” *Cognitive Linguistics* 21(1), 1-34.
- Bolinger, D.L. (1977) *Meaning and Form*. London: Longman.
- Croft, W. (1995) The role of domains in the interpretation of metaphors and metonymies. *Cognitive Linguistics* 4(4):335-370.
- Dirven, R. and R. Pörings (eds.) (2002) *Metaphor and Metonymy in Comparison and Contrast*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Fillmore, C. J. (1982) “Frame semantics.” In *Linguistics in the Morning Calm: Selected Papers from SICOL-1982*. Seoul: Hanshin. 11-138.
- Gamon, David 1993. On the development of epistemicity in the German modal verbs *mögen* and *müssen*. In *Folia Linguistica Historica* 14, 125-176.
- Heine, B., Cjyylaudi, U. and Hünemeyer, F. (1991) *Grammaticalization: A conceptual framework*. Chicago: The Univ. of Chicago Press.
- Hopper, P.J. and E.C. Traugott (1993) *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Hopper, P.J. and E.C. Traugott (2003) *Grammaticalization*. 2ed. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Univ. of Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳 .1986. 『レトリックと人生』 大修館書店)
- Lakoff, G. and M. Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
- Langacker, R. W. (1993) Reference point constructions. In Ronald W. Langacker 1999. *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter, 171-202.
- Moore, K. E. (2006) “Space-to-time mappings and temporal concepts.” *Cognitive Linguistics* 17. 199-244.
- Palmer, F.R. (2001) *Mood and modality 2nd*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Sweetser, E. E. (1990) *From etymology to pragmatics*, Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Tournadre N. and LaPolla R. J. (2014). “Towards a new approach to evidentiality”. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 37(2): 240-263.
- Traugott, E.C. and Dasher, R.B. (2002) *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.

引用文献

辻幸夫編（2002）『認知言語学キーワード事典』 研究社．

南出康世・中邑光男（編）（2023）『ジーニアス英和辞典第6版』 大修館書店．

John A. Simpson（著）・Edmund Weiner（編）（1989）*The Oxford English Dictionary*,
2ed. オックスフォード大学出版局．

フランス・ルネサンス期散文物語の「写実」 ：ニコラ・ドゥ・トロワの空間描写

石橋正孝

本稿では、1530年から1560年にかけてのおよそ30年の間に多産されたフランス散文物語群¹からニコラ・ドゥ・トロワの作品のエピソードをとりあげて、フランス近代文学の原点について中世的要素と近代の萌芽という両義性について考察する。

序

百年戦争（1337～1453）終結からおよそ40年後、フランスはブルターニュを併合（1491～1492）して、国家統一を成し遂げ、中央集権の基盤を固めることになる。奇しくも同じ1492年にコロンブスがアメリカ大陸を発見し、スペイン・ポルトガルに大西洋以西への拡張を先んじられたフランスは、西が塞がれたために東に拡張を図りイタリア戦争をしかける。それを契機としてイタリア・ルネサンスがフランスに流入し、これがフランス近代文学の出発点となる²。

この近代の出発点において、散文物語の状況はどうなっていたかを見ると、1515年のフィリップ・ドゥ・ヴィニユールの書きかけの短編集が確認できるが、それ以外は1530年から1560年にかけて、短編・長編物語の出版が一気に噴出した。フランス語で、印刷術を用いて、出版物として作られた初めての作品群という意味で、この30年間は、近代散文物語の揺籃の場所として捉えることができる³。

ところが1560年以降は、急速にこの散文物語の興隆が幕を閉じ、その後には同種の物語が影を潜めてしまう。これは、宗教改革が宗教戦争へと変容・暴力化する時期と一致する。社会全体が、プロテスタントとカトリックに二分されて血の争いが16世紀末まで続く暗い不安の時代に突入するのであり、こうした時代精神が散文物語の流行を終わらせたのである。

このように当時の散文物語多産の一過性の現象は、歴史的因果関係の中に組み入れることができるが、同時にこうした物語の受け皿としての読者を生み出した社会の背景を理解しなければ、口承文学が印刷文学へと移行することで物語に何が起きたのかを理解することはできない。そのために、フランス・ルネサンスという時代が置かれた動的移行期について、その前の時代からの政治・文化・社会・軍事・宗教など、大きな変化が起きたすべての領域での動的理解が欠かせない。

まずこの時期の長編としては、エリゼンヌ・ドゥ・クレンヌ（本名マルグリット・ドゥ・ブリエ Marguerite de Briet）の『愛から生じる悲痛なる煩悶⁴』（1538）、フランソワ・ラブレーの作品群（1532-1548）⁵、バルテレミー・アノーの『ラレクトール⁶』（1560）が挙げられる。

短編群はより多くの作品が認められる。時系列で見ると、フィリップ・ドゥ・ヴィニユールの『新百話集⁷』（1515）が例外的な先駆けとして認められるが、ジャンヌ・フロールの『恋物語集⁸』（1531年）、ノエル・デュ・ファイユの『田園閑話⁹』（1547年）、『ユートラペルの雑談集』（1548年）、ボナヴァンチュール・デ・ペリエの『新笑話集¹⁰』（1558年死後出版）、ニコラ・ドゥ・トロワの『グラン・パランゴン』（1535年頃執筆開始、1866年死後出版）、そして最後にフランソワ1世の姉マルグリット・ドゥ・アングレーム¹¹がボッカッチョの『デカメロン（十日物語）』に着想を得た、『エプタメロン（八日物語）¹²』（1559年死後出版）を書いている。

この中で現代まで読み継がれているのは、フランソワ・ラブレーの作品群のみであろう。作品たちが、果たして同時代のフランソワ・ラブレーの作品のように現代でも一般に受容されているかといえ、そうではない。「文学史上の

意義」と、古典として、読み物として数世紀以上に渡って読み継がれていくかどうかという「時の洗礼」の価値は必ずしも一致しないが、フランス近代文学の揺籃の場における散文物語群は、「時の洗礼」を生き延びることはできなかったものの、フランス近代文学の揺籃の場における散文物語群が含んでいた文学史上の意義を考慮しなければならない。

本稿では、ニコラ・ドゥ・トロワの『グラン・パランゴン』を分析対象とし、当時の散文物語における空間描写、特に写実（リアリティー）の在り方に着目することで、近代文学への過渡的特性を歴史的な文脈に組み入れながら考察する。

ニコラ・ドゥ・トロワと『グラン・パランゴン¹³』

ニコラ・ドゥ・トロワ¹⁴は、馬具職人という平民出身でありながら、読み書きができ、自ら短編集を執筆した異色の経歴を持つ人物である。彼の詳細な生涯は不明だが、シャンパーニュ地方のトロワ出身であることからこの名で呼ばれる。彼の作品は、中世以来の伝統的な小話を集めたものであり、出版されたのは彼の死後、はるか時代が下った1866年である。しかし、彼自身が作品の冒頭で執筆を始めた時期を1532年頃と記しているため、この年が文学史上の執筆年として認識されている。

この作品が文学史上で注目されるのは、作者が平民出身であることと、ボッカッチョの『デカメロン』をはじめとするイタリア短編文学の影響を公言している点にある。当時の作家の多くは、裕福な法服貴族や貴族階級の出身で、十分な教育を受け、イタリア文学に触れる機会も豊富だった。しかし、地方都市の馬具職人が独学でボッカッチョを読み、自ら民話や小話、さらには『デカメロン』からの翻案を書き留めたことは、当時の平民の教育水準の高さと、近代へと向かうフランス散文文学の豊かな土壌を示唆している。

とはいえ、ラブレーの作品群以外は時の流れに埋もれてしまったように、ニコラ・ドゥ・トロワの作品がとりわけ優れた評価を得ているわけではない。本稿で彼の作品を取り上げる理由は、「子供殺し」を題材とした第32話が、その

空間描写において議論に値すると考えられるからである。しかし、実際には、このエピソード以外は中世的な要素を色濃く残しており、他の多くの散文短編集と同質である。

典型的な「中世的」物語：第12話の分析

まず、中世と近代の狭間の状況を理解するため、「近代的」であることと対比して「中世的」な特徴を考察する。その典型例として、3ページの小話である第12話「最高の願い¹⁵」を分析する。

「ある時、ある紳士が召使を連れて用事でリヨンからサン・クロードまで出かけて行った。宿に着いて夕食をとろうと食事部屋のテーブルに座ると、リヨンから紳士と同じ行程をとる商人が同じく宿に到着し、宿の女主人から暖かく迎え入れられた。というのも、彼女はこの商人と知り合いで、彼には紳士がちょうど夕食のテーブルに着いたばかりであることを説明し、一方の紳士には以下のように頼んだ。「旦那様、こちらに私の知り合いの正直な商人がおりまして、旦那様と同じ道のを旅しております。もしよろしければ夕飯のテーブルを一緒にしていただいてもよろしいでしょうか。彼は本当に愉快な方です。」それに対して紳士は言った。「もちろん、すぐにこちらに呼びなさい。私も楽しめそうだ¹⁶。」

この後、紳士と商人にフランシスコ派の僧侶が加わり、夕食を共にしながら、最も女主人の気に入る願い事をかけた者が宿代を免除されるという賭けを行う。話は僧侶の好色な願い事が気に入られ、紳士と商人が宿代を支払うという筋書きで進む。

物語自体は会話中心の頓知話であり、当時の典型的な形式である。同様の内容は同時代の他の作品にも見られる¹⁷。物語の筋書きは登場人物の会話を中心に進み、個人的な人間描写は皆無である。登場人物は、その職業や社会的地位、例えば「紳士」「商人」「修道僧」「宿屋の女主人」といった類型として描かれ

ることで、物語における役割が決定される。これは、中世の聖史劇や口承の寓意物語に由来する特徴である。作品のタイトルである『グラン・パランゴン』もまた、「お手本、モデル、雛型」を意味し、各小話のタイトル（6話「悪魔をだます老婆の知恵」、19話「靴屋とその同僚」など）と同様に、人物が類型化されていることを示している¹⁸。宿屋の独身の女主人や修道僧が好色な性格として描かれる点も、当時の小話の典型に収まっている。

当時の物語の典型としてこの話をとりあげたが、これは近代写実小説の特徴とは対極をなしている。それは、「小説、それは往来に沿って持ち歩かれる鏡である « Un roman est un miroir qui se promène sur une grande route. »」というスタンダールの『赤と黒』の中の警句に端的に示されている通り¹⁹、虚構空間に現実のようリアリティーを構築する近代文学の視点から見ると、ニコラ・ドゥ・トロワの短編集は、近代文学の揺籃期としてよりも、中世文学の最後の場として捉える方がより適切だろう²⁰。

情報としての物語と近代写実への転換

この30年間の作品群が、文学史的に「中世の名残」と評価される要素は、登場人物の類型化だけではない。同時代の作品に共通して見られるのは、口承形式の語り口がそのまま文字化されている点である。物語の冒頭や随所で、「皆さんもすでにご存じと思いますが」や「これほど真実なことはない」といった、読者への呼びかけと真実性の強調が繰り返される。

この真実性の強調には二つの背景がある。一つは、物語が「情報」として流通・消費されていたことである。短編物語を意味する「*nouvelle*」は、ラテン語の *novellus*（新しい）に由来し、11世紀頃には「新しい情報、ニュース」を意味するようになっていた²¹。静態的な中世社会において、行商人や吟遊詩人が運ぶ物語は、人々の無聊を慰める貴重な娯楽であり、それが「本当にあった出来事」であることが重要視された。虚構であってはならなかったのである。

もう一つの背景は、印刷術の役割の転換である。1480年代にパリで活版印刷

が普及し始めると²²、当初は高価で難解な学術書が中心だった出版物²³は、商業的な成功を求めて大衆向けの題材へと広がっていった。1530年代に入ると商業資本主義が加速し、市場や見本市は「情報、ゴシップ、噂話の交換」の拠点となり²⁴、印刷業者はこうした需要に応える形で、口承文学や騎士道物語を出版し始めたのである。

このように、印刷産業の興隆と歩調を合わせる形で、短編物語は近隣で起きた事件などの最新ニュースとしての意味合いを強く持つようになった。したがって、「話の事実性の強調」は、ニュースとしての側面と口承文学の特質という二つの面から説明できる。

この点で、同時代の作品群と近代写実小説の根本的な違いが明らかになる。話者による「語られる話の真実性」の強調は、近代写実小説が目指す「語られる虚構空間の迫真性 (*vraisemblance*)²⁵」、すなわちルカーチが言うところの虚構空間における全体性の追求²⁶とは方向性が根本的に異なる。この「出来事が本当にあった」ことを強調する姿勢が、「語られる物語空間をいかに本当らしく語るか」へと大きく転換したのはいつであり、その契機は何であったのか、これが近代文学の揺籃期を考える上での重要な命題となる。

空間描写

ここで、第32話「防がれた子殺し」の空間描写を詳細に見ていきたい。この物語は、僧院で妊娠させられた若い女性が、生まれたばかりの赤ん坊を畑で殺そうとする瞬間を農民が防いで僧院の墮落が明らかになるという筋書きであり、他の短編と一線を画すほど際立った視覚表現の多さが特徴である。

«そこで、私が申したとおり、この農民が寝そべりながら昼飯を食べていると、生け垣と小さな堀との間から、美しく若い女が此方にやってくるのが見えてきました。その娘は、見られていることにきづかずに野原を横切り、その農民の方にまっすぐ向かってきました。男は、こちらには通れる道もないことが奇妙にみえ、娘がどこ

に何をしに行くのかを見るために、娘を見ることに集中し、彼女をこっそりと見張りました。娘は堀のところまでたどり着くと、誰かを見ることのないかを見るために辺りを見回し、誰も見えないことを確認しました。そこで、娘は、着物の中から前の晩に産んだ赤ん坊を取り出し、草の上に置きました。そこで、靴紐をほどいて窒息させる為²⁷に赤ん坊の首の回りに巻いて、赤ん坊を掘りの中に置きました。私が申しているようにブドウ畑の中にいた農民は、生け垣を通して娘の秘密を見て、一語も発することなく一部始終を見ていました。しかしながら、その娘が赤ん坊を絞め殺そうとしているのを見ると、男は叫びました²⁷。》

これも短い話であるが、他の多くの短編とは異なり、下線部が示す通りにこの時代としては際立った空間描写が展開されている²⁸。引用箇所では、視覚に関して「見る」の関連語（voir, voyant, regarder）は186語中11語に上る。

口承文学の名残である「私が申したとおりに」「私が申しているとおりに」といった語り手の呼びかけが散見される点で、他の話と共通しているが²⁹、「生け垣」「小さな堀」「野原を横切り」といった描写と、それに伴う視覚関連語（voir, voyant, regarder）の頻出は、虚構の空間に三次元的な奥行きを与えているように感じられる。

ところが、この描写が実際に三次元的な奥行きを構築しているかという点、そうではない。ぶどう畑にいる農民と、生け垣、堀、そして娘や赤ん坊との間の位置関係は不明確である。上下や左右といった関係性の明示がなく、空間はあくまで平面的に描かれている。言い換えれば、個々の要素は舞台装置として存在しているものの、それらが相互にどのような位置にあるのかは明確に示されていない。

この点に関して M. マクルーハン³⁰は、印刷術の発明によって16世紀は人間の世界認識の知覚バランスが大きく変化し、視覚優位になったと指摘している³⁰。彼は、この知覚の変化を、絵画や建築における遠近法の発明と関連づけて論じ、物語空間に三次元的な奥行きがもたらされたのはシェイクスピアの『リア王』（1605年）が最初だとしているが³¹、言葉の連なりで構成される空間描写が、ど

のようにして三次元空間³²を生み出すのだろうか³³。絵画は消失点を設定することで三次元を構築するが、言語には視覚的な消失点を直接移植する術はない。

では、なぜニコラ・ドゥ・トロワの第32話の描写に「三次元的な奥行き」を感じるのだろうか。その印象は、「読む」という行為の過程で、読者が能動的に空間を再構築する体験に依拠している³⁴。

具体的には、描写に欠けている対象物の位置関係を補うのは、読者自身である。「生け垣と小さな堀の間から、美しい若い女が此方（こちら）にやってきた」という記述は、叙述される行動（時間）と方向を示す副詞「此方」を読み手が結びつけることで、虚構空間に奥行きが生まれている。これは言語記号そのものの作用ではなく、記号の連鎖から読者が主体的に虚構空間を構築する、あるいは補完する働きである。

言い換えれば、虚構空間という指示対象（レフェラン）を持たない言語記号の中で、空間的奥行きを積極的に読み取るか否かは、読むという行為における読者と話者の「共犯関係」によって初めて成り立つ。これは、二次元のキャンバスに描かれた遠近法を「錯覚」とみなすか、その「錯覚」を奥行きとして受け入れるか、という芸術体験の在り方と本質的に同じことである。

しかし、第32話の空間描写が中世的な二次元を前提としていることは事実である。前後・左右の位置関係が欠如しているため、現代の読者が奥行きを補完することは可能でも、記号レベルでは写実的な奥行きが不在である。

それでは、マクルーハンが『リア王』を最初の三次元空間の描写と見なすように、物語における遠近法、すなわち虚構空間の独立性を言葉の連なりに見出すには、絵画における消失点に代わるものが必要となる。それは、G・ジュネットがナラトロジーで提唱した「話者の視点」である³⁵。読者はこの視点を共有することで、そこから展開される虚構空間を、絵画における消失点から構築される遠近法的な空間描写と重ね合わせて認識するのである。つまり、話者と読者が共有する「視線」は、絵画の消失点とは逆のベクトルで働く。

この「話者の視点」によって構築される虚構空間が不完全であれば、三次元空間の構築は不可能となる。不完全な「話者の視点」とは、物語が記号体系と

して完結せず、口承文学のように開かれた状態にある場合である。一方、ジュネットの物語論は、作品世界が筆者からも読者からも独立した静態的な自律的記号体系として意味を持つことを前提としている³⁶。

従って、口承文学の特質をそのまま印刷本に移したニコラ・ドゥ・トロワの物語は、ジュネットがナラトロジーで提唱する「話者の視点」の枠組みでは捉えきれない。口承文学は、吟遊詩人や行商人が村の集会で物語を朗読し、聴衆がその「声」に耳を傾けるといふ、語り手と聞き手の相互作用によって意味が生まれるものであり、物語の意味は、聞き手の反応に応える形でその場で形成される、「開かれた」ものであったと言える。

そもそも、ナラトロジーが「話者の視点」を分析の核心に据えていることからわかるように、近代文学は視覚的なリアリティーの追求が中心にある。物語の語り手や登場人物の内面心理は、視覚的な描写を通じて深化していく。このように、描写と内面心理のリアリティーを重視するナラトロジーのような近代文学理論は、二次元的な空間と寓意的な人物を前提とするルネサンス以前の文学には適用できない³⁷。なぜなら、ナラトロジーは、物語空間を筆者からも読者からも独立した静的な記号体系として捉えることを前提としているからである。

結果的に第32話の空間描写は、一見すると近代的な写実描写に思えるが、あくまで中世的な枠組みに留まるものである。16世紀のフランスは、中世と近代の狭間に位置し、政治・経済・思想の根本的な変革の渦中にあった。T. トドロフが説くように³⁸、ルネサンスにアプローチする際、中世の残滓から近代の萌芽を探る進歩史観は、時に勇み足を招く。この時代の作品を近代フランス文学の揺籃期として位置づける際には、その文学史的意義の大きさから、過剰な評価を与えようとする誘惑に陥らないよう留意しなければならない。

フランス・ナショナリズム

ニコラ・ドゥ・トロワの作品が生まれた1530年から1560年の約30年間を論じ

る際、トドロフ的な進歩史観だけでなく、フランスの愛国主義的なバイアスにも留意しなければならない。P. ムニエが強調するこの時代の作品群の「フランスの創造性³⁹」は、フランス国家統一後のナショナリズムの高揚と、公用語の統一という言語的背景に支えられている。1539年のヴィレル・コトレ勅令⁴⁰によりフランス語が公用語として強制され、その10年後の1549年には、プレイヤード派のジョアキム・デュ・ベレーが『フランス語の擁護と顕揚⁴¹』を出版するに至る。

短編の世界でも、こうしたフランス語を称揚する知的運動の影響が見られる。トロワ地方の馬具職人であるニコラ・ドゥ・トロワに対し、ボナヴァンチュール・デ・ペリエは上流階級の知識人であった。フランソワ1世の姉マルグリット・ドゥ・ナヴァールのサークルに所属し、聖書のフランス語訳事業にも参加したデ・ペリエは、没後出版された『笑話集』の第一話の形をとった序文で、作品の意図を明確に表明している。

そしてまた、私は自分の話の種を探しに、コンスタンティノーブルやフィレンツェ、あるいはヴェネツィアといった、それほど遠い場所まで出かけたりはしなかった。なぜなら、もし私があなた方にお届けしたいと思っているものが、すなわちあなた方を楽しませるためのものであるならば、遠くまでそれを借りに行くよりも、我々の家の戸口にある道具（材料）を用いる方が、より良いことではないだろうか？…そのような遠い国々からやってくる話というものは、この場所に届けられるまでに、サフランのように品質が悪くなるか、絹織物のように値上がりするか、香辛料のように半分が失われるか、ワインのように変質するか、宝石のように偽造されるか、あるいはあらゆるものと同じようにごまかされてしまうかの、いずれかになるのだ⁴²。

デ・ペリエの文章には、当時のフランスに広まっていたイタリア文化の流行に対する強い反発心を読み取れる。彼は、わざわざコンスタンティノーブルやフィレンツェから輸入しなくても、フランスの物語で十分に楽しめると主張し、遠方から持ち込まれた素材は「サフランのように品質が悪くなり」「ワインの

ように変質する」と断じている。上流知識人であるデ・ペリエは、平民よりも早くイタリア・ルネサンスに触れる機会があった。彼のこの証言は、フランス人文主義者たちがイタリアに対して露骨な対抗意識を持っていた歴史的証左であり、それが短編集の序文に置かれていることは非常に興味深い。

イタリアのクワトロチェント（15世紀ルネサンス）文化は、1494年のイタリア戦争を機にフランスに直接流入した。北イタリアに侵攻したフランスは、その成熟した文化に圧倒され、その影響は王宮にまで及んだ。さらに、1533年にはフランソワ1世の次男で後のアンリ2世⁴³の妻としてフィレンツェのメディチ家からカトリーヌ・ドゥ・メディシスを迎え入れたことで、イタリア・ルネサンスの恩恵が直接フランスにもたらされることになる。このイタリア文化の影響は絶大で⁴⁴、16世紀前半のフランスの政治、軍事、社会、文化のあらゆる領域に、後の近代フランスの原型となる要素を深く植え付けた。

こうしたイタリアに対する羨望、嫉妬、反発心は、詩の世界では『フランス語の擁護と顕揚』に、短編の世界ではボナヴァンチュール・デ・ペリエの証言に見て取れる。特に短編文学においては、ボッカッチョの『デカメロン』が大きな影響力を持っていた。14世紀にはすでに翻訳が出回っていたが、マルグリット・ドゥ・ナヴァールが1545年に秘書に改めて翻訳させたものが同年出版され、マルグリットが『デカメロン』の構成に倣って『エプタメロン』を執筆したように、この揺籃期の短編群にとって重要なモデルとなる。

短編の語源として「ニュース」を意味する *nouvelle* を挙げたが、実際には『デカメロン』で短編を指す言葉として用いられた *nouvelle* が、「ニュース」としての意味に加えて、あるいはそれ以上の影響力をもって当時の短編文学に浸透していくことになる。

長編物語についてはどうか。この多産な30年間において、長編はラブレーの作品群を除けば既出のエリゼンヌ・ドゥ・クレンヌの作品とラレクトールが挙げられる程度で、数は少なく、この2作はイタリアではなくスペインの騎士道物語の影響を強く受けている。特に『アマデイス・デ・ガウラ⁴⁵』はヨーロッパ全土で流行した典型的な騎士道恋愛文学である。16世紀前半に隆盛を極めた

スペイン騎士道文学は、後にセルバンテスの『ドン・キホーテ』という反動的な作品を生み出すことになるが、これもまた、1453年のレコンキスタによってもたらされたスペインの政治的・社会的安定が背景にあると言える。1540年のフランス語訳の出版は、大きな反響を呼んだ。

これに対し、フランス独自の長編物語の境界を明確に見出すことは難しい。これらは基本的に、中世の武勲詩を口語体に直したものであり、著作権が存在しない時代のため、無記名の加筆・改変が繰り返された。このため、独自性という点では価値が低い作品が広く普及することになったのである。

近代フランス文学の出発点を「書かれた作品」から「印刷された作品」への移行と捉えると、フランスが最初に印刷術の恩恵を受けた文学が、中世武勲詩の翻案と海外翻訳文学であったという事実は、フランス文学のアイデンティティーを考える上で、フランス人研究者にとって少々忸怩たる思いを抱かせるものである⁴⁶。

その一方で、この30年間に突然現れた、初めて統一されたフランス語で書かれた物語群に対しては、「フランスの創造」という願望に基づくバイアスがかかっているという主張も無視できない。

イタリアやスペインの文学からの影響が、フランス近代文学の出発点にあるということは、ライバル意識、焦り、劣等感といった負の感情から始まったとも言える。しかし、これらの感情は、結果としてフランスの国家、社会、文化のアイデンティティー形成を促すことにつながった。この30年間の作品群を考察する際、この点を決して見失ってはならない。

したがって、この時期の文学史的評価は、P. ムニエのように「フランスの創造性」を強く主張する立場と、イタリアやスペインの影響をより客観的に評価する立場に分かれる。私たちは、当時の人文主義者が抱いていた愛国主義と、現代フランス人研究者のそれに、二重のバイアスが存在することを意識する必要がある。

写実の転換

本稿は、1530年から1560年にかけての、近代フランス文学最初期の作品群をニコラ・ドゥ・トロワの作品から考察してきた。ここまで、この時代が中世と近代の狭間に位置し、近代的というよりも中世的な要素を色濃く持つこと、そしてフランスのナショナリズムというバイアスを考慮する必要があることを指摘した。最後に、近代写実主義小説の源流として、この時期の文学がなぜ中世的な状態に留まっていたのか、その要因について考察する。

すでに述べたように、ニコラ・ドゥ・トロワの短編群は、ニュースとしての「語られる内容の事実性」を重視していた。これに対し、近代写実主義小説は、虚構空間のリアリズムを特質とする。では、「語られる事実性」から「虚構空間の真実性」への大転換は、一体何が契機となったのだろうか。

まず、当時の作品に近代写実主義のリアリズムが欠如している背景には、物語の消費様式の違いがある。写実主義小説は、ジュネットのナラトロジーが想定するように、作者や読者から切り離された静的な記号モデルとして成立する。これは、語り手と聞き手の関係性を排除し、個室で一人で黙読するという消費様式を前提とする文学である。

これは見方を変えれば、語り部と聞き手が村の集会で物語を共有する文学に対し、近代写実主義小説は、共同体から切り離され、個室で黙読する「近代個人」の誕生と同時に現れたと考えることもできるだろう。

また、中世の文学に写実性が欠如していた別の理由として、現実を否定するキリスト教の思想が挙げられる。ルカーチが虚構空間における「全体性の追求」は神の死を前提とすると述べているように⁴⁷、宗教改革は文学にこの転換の契機をもたらしたとも言える⁴⁸。写実の進化は、キリスト教からの人間の解放という大きな流れと捉えることも可能である。

フランス中世の絵画や刺繍といった視覚芸術を見れば明らかだが、中世のキリスト教芸術は、人間を写実的に描くことを避けている。人間は単純な二次元の線で構成され、表情が描かれることもない。このような寓意と現実の単純化

は、物語にも反映されていた。

キリスト教の世界観では、最後の審判後の救済が至上価値とされ、現世よりも死後の世界が優位に置かれてきたため、現世は否定されてきた。人間もまた、神の似姿でありながら、原罪を背負う存在として断罪の対象であった。芸術において、肉体を持つ人間は、寓意的な世界で矮小化され、単純化される対象だったのである。

この中世的な世界観から、三次元空間の写実へと飛躍するきっかけは、キリスト教の秩序を破壊した人文主義者たちの活躍に見出せる。彼らは古代ギリシア・ローマの古典を援用することで、人間をありのままに称賛し、キリスト教的抑圧から解放した。ピコ・デラ・ミランドラの「人間の尊厳」の宣言に始まる人文主義者の動きは、現実肯定と人間肯定という認識の大転換を促した。

ルネサンス期の人々は、現実をありのままに肯定し、直視するようになった。この認識の転換が、空間認識と描写におけるリアリティーの追求をもたらした。その結果、絵画の世界では、人物の外見を忠実に再現する肖像画が大量に描かれ、遠近法が発明された。これは、現実空間を忠実に再現することが、もはやキリスト教的なタブーではなくなったことを意味する。ルネサンスの人間は、現実を、ありのままに肯定して見るようになったのだ。

線條性による描写の制約

しかし、この写実の波が文学空間に本格的に押し寄せるには、16世紀前半は時期尚早であった。その理由は、当時の文学に口承文学の影響が色濃く残っており、言葉の線條性が描写の足枷となっていたからである。

口承文学では、語り手が場面を延々と描写し始めると、聞き手は興味を失ってしまう。そのため、叙述 (*narratif*) によって筋を進行させ、描写 (*descriptif*) を最小限に抑えることで、物語の迫真性を生み出していた。こうした相互性を前提とした口承文学では、叙述の比重が圧倒的に大きくなる⁴⁹。W. J. オングが指摘するように、「話のすじを展開するということは、こうした時間の流れ

を言葉にする」ことであり⁵⁰，言葉の線条性という制約から，叙述が優先されるのは必然だったのである。

印刷術による線条性からの解放

一方で，口承からさらに一步進み，朗読や音読から「黙読」へと移行することで，文学の意味がこの線条性から一定の割合で解放されることになる。中世において黙読は，「沈黙の誓い」を掲げる修道院などの例外を除いて一般的ではなかった。貴族階級でさえ，文学は「朗読を聞く形」でしか享受されていなかったのである⁵¹。文学が「聞く」ものから「読む」ものへと変わるには，印刷術の発明とそれに続く社会構造の変革を待つ必要があった。

紙面に印刷された文字列を，音を発さずに視覚だけで「読む」行為は，音の線条性を飛び越えることを可能にする。これにより，いわゆる「斜め読み」のような視覚的読書が可能となる。本来，口頭での語りや朗読に必要な時間が，黙読によって大幅に短縮される。読者は，ページの文字全体を絵画のように瞬時に視野に入れることで，物語の先を予測し，情報を取捨選択しながら読むことが可能になる。

文字列の情報を視覚的に全体把握できるようになったことは，口承文学からの根本的な転換をもたらした。物語の意味を生成する場が，語り手と聞き手が一体となった村の集会所から，読者個人の内面へと移ったのである。これにより，物語は「語り手と聞き手の共有時間」から解放され，読者は自身のペースで読み進められるようになる。この線条性からの解放は，叙述の時間的拘束から解き放たれることを意味し，その結果，描写が初めて「叙述の流れに対抗する」余地を獲得することになるのだ⁵²。

結論

本稿では，中世と近代の過渡期にある1530年から1560年の間の30年間のルネ

サンス散文文学をフランス近代写実小説の揺籃の場と位置づけ、その中からニコラ・ドゥ・トロワの作品における中世的な要素と近代の萌芽を考察してきた。

当時の作品群の中では際立った空間描写をとりあげ、そこに近代の萌芽としての遠近法的奥行を見出すことができるかを吟味した。結果として、左右の区別もない平面的描写であることを指摘しつつも、一方で現代読者はそこに空間的奥行を見出すことは可能であることを述べた。知覚動詞としての *voir, regarder* が繰り返される中で、読者は読む行為 = 話者との同調を通して虚構空間を体験するのであり、写実的虚構空間に遠近法的奥行を付与することを前提とする現代読者は、その言語の羅列から虚構空間を構築する「読む」という作業において、必然的に奥行を補って読むのである。虚構物語における身体表象と同様に⁵³、描写される虚構空間も、それを構成する言語のみで構築されるのではなく、読む行為を通してその空間構築に協働する読者の時代性に依存するのである⁵⁴。

結論として、写実（リアリティー）の追求は、印刷術による読書の非線条性（黙読）と、宗教改革による全体性の喪失、これらがもたらす虚構空間への全体性の移行、そして共同体から切り離された個室での読書という近代文学の条件によって、初めて達成されるものであることを指摘した。ニコラ・ドゥ・トロワの作品は、その達成以前の段階に位置づけられる。このことは、同時代の作品群全体に言えることである。

しかし、これらの作品が依然として前近代的であるということが、この30年間の文学史的な意義を損なうものではない。この散文物語群の盛衰は、写実と虚構の概念が、社会構造、メディア（印刷術）、そして宗教的認識という地殻変動の中でいかに変容し、近代文学の基礎を築いていったかを潜在的に示す、貴重な歴史的証言なのである。

1 以下に述べる30年間の散文物語の興隆に関しては、拙論参照 *Les enjeux littéraires de la représentation du corps : la première partie*, 帝京大学外国語外国文学論集 vol. 20, pp. 70-82.

- 2 ここで留意すべきは、フランス文学には「近世」という概念がなく、中世文学の次に16世紀から近代文学となっている点である。19世紀末の大学制度改革以来、文学の分類は、16世紀から近代文学 *lettres modernes* と称され、現代 *lettres contemporaines* は第二次大戦以降となっている。
- 3 G. ペルーズは、この揺籃期をフランス散文文学の「マグマの状態」と表している。G.-A. Pérouse, *Nouvelles françaises du XVI^e siècle : Images de la vie du temps*, Genève, Droz, 1977, p. 7.
- 4 Marguerite de Briet, (alias Helisenne de Crenne), *Les Angoysses douloureuses qui procedent d'amours*, P. Demats (éd.), Paris, Les Belles Lettres, 1968.
- 5 F. Rabelais, *l'Oeuvre complète*, M. Huchon (éd.), Paris, Gallimard, collection « Pléiade », 1994.
- 6 Barthélemy Aneau, *Alector ou le Coq*, (1560), M.-M. Fontaine (éd.), Droz, 1996.
- 7 Philippe de Vigneulles, *Cents nouvelles nouvelles (1505-1515)*, Charles H. Livingston (éd.), Droz, Genève 1972.
- 8 Jeanne Flore, *Comptes Amoureux*, 1531, Réimpression textuelle de l'édition de Lyon, 1574, Slatkine, Genève, 1971.
- 9 Léon Ladulfi, (alias Noël du Fail), *Propos rustiques*, texte original de 1547, A. De La Borderie (éd.), Genève, Slatkine Reprints, 1970, 297 p ; G.-A. Pérouse et R. Dubuis (éd.), Genève, Droz, 1994.
- 10 Bonaventure des Periers, *Nouvelles Recréations et Joyeux Devis (1558)*, K. Kasprzyk (éd.), Paris, Honoré Champion, 1980.
- 11 フランソワ 1 世の姉であるマルグリットに関しては、歴史学においてはその出身地を元にマルグリット・ドゥ・アングレームとすることで、歴史上同姓同名が 3 人いるマルグリット・ドゥ・ナヴァールの目印としていたが、文学の世界では『エプタメロン』執筆時のナヴァール妃の名称を用いていた。近年ではナヴァールで呼称の統一の傾向が見られるようになっている。本稿でも、ナヴァールで統一する。
- 12 Marguerite de Navarre, *l'Heptaméron*, Paris, M. François (éd.), Classiques Garnier, 1991.
- 13 Nicolas de Troyes, *Le Grand Parangon des nouvelles nouvelles*, 1532, K. Kasprezyk (éd.), Paris, Librairie Marcel Didier, 1970.
- 14 ニコラ・ドゥ・トロワについての研究は、以下参照。K. Kasprezy, *Nicolas de Troyes et le genre narratif en France au XVI^e siècle*, Warszawa-Paris, Panstwowe Wydawn, 1963. 作者の生涯と、各エピソードについて背景・系譜などを個々に取り上げているが、本稿で取り上げるエピソードに関しては、「子殺し」のエピソードという指摘のみで、その空間描写の希少性に対する言及はない。
- 15 Nicolas de Troyes, *op. cit.*, « XII : les meilleurs vœux », pp. 63-65.
- 16 *Ibid.*, p. 63 : Une foys advint que ung gentil homme avec son paige partit de Lion et s'en alloit à ses affaires par devers Saint Claude, Or es il ainsi que à une disnée

arriva seul au logis, et se mettant à table pour disner, va arriver un marchand qui venoit de Lion et aloit le chemin du gentil homme. L'ostesse luy fist bon recueil, car elle le congnoissoit, et luy dist que il y avoit en une chambre un gentil homme qui ne se faisoit que mettre à table. Et luy alla tantost demander : « Monseigneur, il y a là bas un honneste marchand que je congnois et qui va votre chemin. Vous plaist il qu'i vienne disner icy avec vous ? je vous prometz, dit elle, que il es tout plain recreatif. » « Et je vous en prie, dis le gentil homme, faictes le venir incontinent, car je vous prometz que j'en seré joyeux. »

- 17 Philippe de Vigneulles, *Les cent nouvelles nouvelles*, Ch. Livingson (éd.), Genève, Droz, 1972.
- 18 作品内の登場人物の類型に関しては, K. Kasprezy が校訂版の序分で詳細に分析をしている。「Introduction」 dans Nicolas de Troyes, *Le Grand Parangon des nouvelles nouvelles*, 1532, K. Kasprezyk (éd.), Paris, Librairie Marcel Didier, 1970, pp. XVI – XXX.
- 19 森本浩一, 「再現のリアリティ」, 東北大学文学研究科研究年報, 第65号, 2015年, pp. 104-77.
- 20 同時代の作品としてはノエル・デュ・ファイユについて, 拙論で写実についての議論をしている。拙論『フランス16世紀の「ダンス論争」と散文文学に関する考察』, 日本大学法学部桜文論叢99号, 2019年, pp. 14-16.
- 21 A. Rey (dir.), *Dictionnaire historique de la langue française : M-Z*, Paris, Le Robert 1992 1995, p. 1336.
- 22 書物の歴史に関しては, 以下参照。L. Febvre, H-J Martin *L'apparition du livre*, Paris, Albin-Michel, 1958, 1999 ; A. Parent, *Les Métiers du livre à Paris au XVIe siècle, 1535-1560*, Genève, Droz, 1974 ; A. ベティグリー, 『印刷という革命・ルネサンスの本と日常生活』, 2010年, 桑木野幸司訳, 白水社, 2017年 ; J. ヘリッシュ, 『メディアの歴史・ビッグバンからインターネットまで』, 2011年, 川島健太郎, 他訳, 法政大学出版局, 2017年 ; 大黒俊二 『声と文字』, 岩波書店, 2008年 ; A. グラフトン, 『テキストの擁護者たち・近代ヨーロッパにおける人文学の誕生』, 1991年, ヒロ・ヒライ, 福西亮輔 訳, 勁草書房, 2017年。
- 23 A. ベティグリー, 『印刷という革命・ルネサンスの本と日常生活』, 2010年, 桑木野幸司訳, 白水社, 2017年, p. 12.
- 24 *Idem.*, *op.cit.*, pp. 220-221.
- 25 リアリティー=もってもらしさの概念, およびリアリズムの言葉を避けてこのもってもらしさの言葉を使うことについては, 以下参照。Ph. Hamon, *Du descriptif*, Paris, Hachette, 1981, 1993.
- 26 G. Lukacs, *La théorie du roman*, Berlin, P. Cassirer, 1920, J. Clairevoye (trad.par), 1920, Paris, Danoël, 1968, pp. 64-65.
- 27 *Le Grand Parangon*, Ch 32, « L'infanticide empêché », pp. 92-93, 84 v° : « Et ledit

laboureur, luy estant couché en desjument, ainsi que je vous ay ja dit, par entre la haye et le fossé va veoir venir une belle jeune fille laquelle tira à travers les prés sans y penser, tout droit devers ledit laboureur. Luy voyant que il n'y avoit point de chemin de ce costé là, se print plus fort à la regarder et espier pour veoir là où elle alloit et que elle vouloit faire. Et elle venue devient ledit fossé, regarda de tous costés pour veoir sy ell everroit personne, mais elle ne vit riens. Alors elle tira de dedens sa robe ung bel enfent donc elle en avoit acouché la nuyt, et le mist là sur l'erbe, et print le lien de sa chausse et luy mist dedens le col pour l'estrangler et le mettre dedens ledit fossé. Ledit laboureur estant dedens sa vigne, ainsi que je vous ay compté, au travers de la haye veoit faire tout le mistere à ladicte fille, sans sonner ung seul mot regarda tout. Mais quant il vit que elle vouloit estrangler l'enfent, se print à escrier. »

- 28 この空間描写の多さはすでに拙論で指摘したが、その際は、同時代で他に類を見ない空間描写に、近代の萌芽としての可能性を提示するのみにとどめたが、今回はこの空間描写の近代性を吟味し、ルネサンス期の写実描写についてさらに考察を深めていく。「散文物語から読むフランス・ルネサンス」帝京大学総合教育センター論集 vol. 2, 2011年, pp. 63-69.
- 29 語り手が読み手に語りかけるのが当然のルネサンス期の散文物語に比べると、近代写実小説の世界といかに相容れないことが明確になる。フロベールの『ボヴァリー夫人』の冒頭シーンにおいて、シャルル・ボヴァリーの転校の様子を「我々 = nous」で語り始め、すぐに三人称に移行して二度と一人称が出てこないことは、ナラトロジーにおける大問題として捉えられることは、ナラトロジーという文学理論が近代以降の文学を前提としており、閉ざされた静態的記号空間としてのみ物語空間を想定している。
- 30 M. Macluhan, *La galaxie Gutenberg*, University of Toronto Presse, 1962, J. Paré (trad. par), Gallimard, Paris, 1977.
- 31 M. Macluhan, *op.cit.*, pp. 44-47 ; Ph. Hamon, *op.cit.*, p. 13.
- 32 正確には叙述の時間軸を入れて四次元と捉えるべきであろうが絵画との対比での議論に言語の線条性が要求する時間の議論が混同されないようにするために、ここでは議論の便宜上三次元で統一しておく。
- 33 マクルーハンのメディア論は70年代に大きな反響を呼んだが、その刺激的な内容に比して学術的根拠の証明の弱さから、徐々に批判的・否定的な受容が進むようになっていく。J. グリック, 『インフォメーション・情報技術の人類史』, 楡井浩一訳, 2011年, 新潮社, 2013年, pp. 39-66.
- 34 意味発生の現場としての読む行為と話者・読者の関係性については、拙論参照。「小説における身体性の在り処」, 日本大学法学部桜文論叢103号, 2021年, pp. 205-221.
- 35 G. Genette, *Figures* II (1969), III (1972), Paris, Seuil.
- 36 ジュネットのナラトロジーの3つの制約・限界に関しては、拙論参照。「文学におけ

- る身体表象の可能性と限界についての考察』, 帝京大学総合教育センター論集 vol. 1, 2010, p. 72.
- 37 H. R. Jauss, « Littérature médiévale et théorie des genres », dans *Théorie des genres*, (éd. par) G. Genette, Paris, Seuil, 1986, pp. 42-43.
- 38 T. Todorov, *Eloge de l'individu*, Paris, Adam Brio, 2004, p. 45.
- 39 P. Mounier, « Quelques substituts de *roman* au XVI^e siècle : innovation romanesque et prudence lexicale » dans *Le Roman français au XVI^e siècle : ou le renouveau d'un genre dans le contexte européen*, Strasbourg, Presses Universitaires de Strasbourg, p. 6.
- 40 2023年10月30日に, ヴィレル・コトレ城において, 現職大統領フランソワ・マクロンの肝いりで作られた国際フランス語博物館が開館した。1539年のヴィレル・コトレ勅令をフランス語の原点と捉える意識が現代フランスにも脈々と受け継がれている証である。 <https://www.cite-langue-francaise.fr/>
- 41 デュ・ベレーに関しては, 以下参照。Bruno Roger-Vasselin, *Du Bellay, une révolution poétique ? La Deffence, et illustration de la langue françoise & l'Olive (1549-1550)*, PUF, Paris, 2007. 邦訳に関しては, 以下参照。ジョアシャン・デュ・ベレー, 『フランス語の擁護と顯揚』加藤美雄訳, 白水社, 1943年。
- 42 Bonaventure Des Periers, *Les Nouvelles Recreations et Joyeux Devis*, 1558, (éd. critique par) K. Kasprzyk, Paris, Honoré Champion, 1980, Nouvelle 1 : « *Première nouvelle en forme de preambule* » : « Et puis je ne suis point allé chercher mes comptes à Constantinople, à Florence, ny à Venise : ne si loing que cela. Car s'ilz sont telz que je les vous veulx donner, c'est à dire pour vous recreer n'ayje pas mieux fait d'en prendre les instrumens que nous avons à nostre porte, que non pas les aller emprunter si loing ? [...] Les nouvelles qui viennent de si loingtain pays, avant qu'elles soient rendues sus le lieu, ou elles s'empirent comme le saffran : ou s'encherissent, comme les draps de soye : ou il s'en pert la moyetié, comme d'espriceries : ou se buffetent, comme les vins : ou sont falsifiees, comme les pierreries : ou sont adulterees, comme tout. [...] Lisez hardiment, dames et damoyelles : il n'y ha rien qui ne soit honneste : Mais si d'aventure il y en ha quelques unes d'entres vous qui soyent trop tendrettes, et qui ayent peur de tomber en quelques passages trop gaillars : je leur conseille qu'elles se les facent eschansonner par leur freres, ou par leurs cousins. Je vous dy que je ne croy point ce qu'on dict de Socrate, qu'il fust ainsi sans passions. Il n'y ha ne Platon, ne Xenophon, qui le me fist accroyre. ... Je loueroyz beaucoup plus celuy de nostre temps, qui ha esté si plaisant en sa vie que, par une antonomasie, on l'ha appellé le plaisantin ».
- 43 当時のオルレアン公。オルレアン公爵は, 次期王位の人間の就く地位となっている。
- 44 イタリア戦争を通じてフランスにもたらされたクワトロチェントの影響については

- 多くの研究がされている。(Cf.) J. Balsamo, *L'Italie française. Italianisme et anti-italianisme en France a la fin du XVIe siècle*, thèse Paris IV, 1988, - éd. par, *Passer les Monts ; Français en Italie-l'Italie en France (1494-1525)*, Xe colloque de la Société française d'étude du Seizième Siècle, Paris, Honoré Champion, 1998 ; C. Billot, « Les Italiens naturalisés français sous le règne de François Ier (1514-1517) », *Strutture familiari, epidemie migrazioninell'Italia medievale*, p.477-492 ; I. Cloulas, *Charles VIII et le mirage italien*, Paris, Albin Michel, 1986 ; J.-F. Dubost, *La France italienne*, Paris, Aubier, 1997 ; E. Picot, *Les Italiens en France au XVIe siècle*, Rome, Vecchiarelli, 1995.
- 45 16世紀前半のヨーロッパで大流行した騎士道文学の代表作品であるが、邦訳は2019年と遅い。(cf.) ガルシ・ロドリゲス・デ・モルタンボ, 岩根國和訳, 『アマデイス・デ・ガウラ』, 彩流社, 2019年。
- 46 J.-P. Guillermin, dans son introduction au *Miroir des femmes : roman, conte, théâtre, poésie au XVIe siècle*, 2 vol., J.-P. Guillermin (éd.), Lille, PUL, 1984, vol. 2, p. 7.
- 47 G. Lukacs, *op. cit.*, pp. 64-65.
- 48 すでに、ヨーロッパのアイデンティティは、16世紀以降、宗教改革を契機にキリスト教に基づくものではなくなり、各国間で絶え間なく繰り返された戦争を通して形成された軍事的同一性 = isomorphisme militaire が保証するものとなった。拙論参照。『フランソワ・ラブレーの作品に見る近代軍事革命』, 日本大学法学部桜文論叢101号, 2020年, pp. 1-23.
- 49 叙述・描写を narration, description ではなく、それぞれ叙述的・描写的に該当する narratif, descriptif と呼ぶのは、言説の不可分性であり、完全に分けて考えることができないからである。拙論参照。『小説における身体の在り処』, 日本大学法学部桜文論叢103号, 2021年, pp. 205-221.
- 50 W. J. Ong, 『声の文化と文字の文化』, (Orality and literacy, Methuen, 1982.) 桜井直文 他訳, 藤原書店, 2007年, p. 286.
- 51 Cl. ブリンカー・ヴォン・デルハイデ, 『写本の文化誌・ヨーロッパ中世の文学とメディア』 一條麻美子訳, 白水社, 2017年, pp. 148-149.
- 52 Ph. Hamon, *op.cit.*, p. 5.
- 53 虚構物語を記号的にレフェランから切り離され独立した静態モデルとして捉えるナラトロジーの限界については拙論「文学における身体表象の可能性と限界についての考察」, *op.cit.*, p. 72.
- 54 読む行為を通じた読者の話者への同調作業については、拙論「小説における身体の在り処」 *op.cit.* pp. 217-219.

『源経氏歌集』 四季部注釈稿 (中) 承前

鹿野しのぶ

本稿は『源経氏歌集』四季部注釈稿(上)の続稿(夏歌から秋歌一五〇番歌まで)である。凡例は前稿にしたがう。

夏歌

更衣

七二 桜色のかた見はかへつ夏衣なつしろぎうすくや花に心そめけむ

【合点】 為遠・耕雲

【詞書】 「更衣」。堀河百首題。

【口語訳】 桜色の春の形見はあつさり替えてしまった。夏衣は薄く花に心を染めたのだろうか。

【語釈】 ●かた見―春の「形見」と夏衣の「片身」を掛ける。 ●かへつ―「替ふ」は取り替えるの意。「つ」は意識的な完了の意の助動詞の終止形で三句切れ。 ●うすくや―「夏衣」の縁語。生地の薄い様子と色の薄さの両方の意味を掛ける。「や」は疑問の意の係助詞。 ●心そめけむ―「染む」は「(色を)染める」の意に、「(桜)に対し

て）深く心を寄せる」の意を響かせるか。「けむ」は過去推量の助動詞の連体形で「や」を受けて係り結び。

【参考】本歌「桜色に衣は深く染めて着む花の散りなむのちのかたみに」（『古今集』春上・六六・「題しらず」・紀有朋）

七三 色見えぬ人の心の花染めもうつりやしぬるかはる袂に

【合点】善成

【詞書】七二番歌「更衣」題を受ける。

【口語訳】表立って見せないうつろいやすい人の心の花に似て、花の色に染めた袂も移り替ってしまったのだから。衣替えをした夏の袂に。

【語釈】●色——（表に現れて何とない感じを見せる）けはい、様子。●人の心の花染め——「人の心の花」から「花染め」へと続く表現。「人の心の花」は花のうつろいやすさに人の心の変わりやすさをたとえている。「花染め」は露草の花の汁で染めること。変色しやすいことから、うつろいやすいものたとえにもなる。ここでの「花」は春の花で桜を指している。●うつりやしぬる——「うつる」に衣を替える、更衣の意に、色が「映る」と衣の色が変わるという意を込める。「や」は疑問の係助詞。「ぬる」は完了の助動詞「ぬ」の連体形で係り結び。

【参考】「をりふしもうつればかへつ世の中の人の心の花染めの袖」（『新古今集』夏・一七九・「夏の初めの歌とてよみ侍ける」・俊成女）

余花

七四 おのづから残る木ずゑも見えぬまで散りにし花の跡ぞしげれる

【合点】 なし。

【詞書】 「余花」。『千首』題。

【口語訳】 たまたま花が残っている梢も見えなくなるほど散ってしまった花の跡に新緑が茂っている。

【語釈】 ●見えぬまで―「まで」は程度を表す副助詞。見えなくなるほど。●花の跡ぞしげれる―「ぞ」は強意の係助詞。「しげれる」は連体形で係り結び。「しげる」は新緑が繁っている。【参考】 後撰集歌で、桜が散った後の葉の緑が繁る様子から満開の桜を想起することとしたことを踏まえて、新緑が繁る梢に花の跡を見ると詠んでい

【参考】 「匂ひつつ散りにし花ぞ思ほゆる夏は緑の葉のみ繁れば」（『後撰集』夏・一六五）

卯花隠路

七五 さらにだにとはれぬ庭のかよひぢにあとなき雪と咲ける卯の花

【合点】 善成

【詞書】 「卯花、路を隠す」。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「(略)卯花は雪の色、月の光にまがへてもよめり。名所には卯花山、玉川里、小野にもよめり。此の題の心、うの花の咲きみちて人の通路を埋みたる躰なり。庭ならで山路の事もよむなり。」とある。

【口語訳】 そうでなくてさえ訪れられない庭の通い路に跡をとどめない雪だと咲いている卯花よ。

【語釈】●さらでだに―動詞「然り」の未然形に打消の接続助詞「で」に類推の副助詞「だに」。ただでさえ、の意。●とはれぬ庭の―訪問者のいない庭。●かよひぢにあとなき雪―雪であれば人が通った跡もつくが、卯の花が路を隠しているので跡はつかない。「隠」の文字を「まはして」詠んでいる。●卯の花―【参考】後撰集歌のように卯の花を雪に見立てた。

【参考】「時わかず降れる雪かと見るまでに垣根もたわに咲ける卯花」（『後撰集』夏・一五三・「卯花の垣根ある家にて」・読人しらず）

待郭公

七六 ほととぎすいつまで忍ぶ初音とて待つ夜むなしき数をそふらむ

【合点】 為重・善成・耕雲

【詞書】「待つ郭公」。『千首』題。

【口語訳】 ホトトギスはいつまで忍んでいるのか。初音といって待つ夜に空しく数を加えているのだろう。

【語釈】 ●いつまで忍ぶ―「忍ぶ」は終止形で、二句切れ。●初音とて―「初音」はホトトギスの初鳴きのこと。

「とて」は格助詞「と」と接続助詞「て」の連語。●数をそふらむ―「添ふ」は他動詞下二段活用。「らむ」は現在推量の意の助動詞。初音を待つ夜の日数を数える、ということ。

【参考】「郭公しのぶ比とは知りながらいかに待たるる初音なるらん」（『続拾遺集』夏・一四九・衣笠家良）

七七 深山路はうき世ならぬをほととぎすなどか初音のいでがてにする

【合点】 なし。

【詞書】 七六番歌「待郭公」を受ける。

【口語訳】 深山の奥深い道はつらい世ではないものを、ホトトギスは どうして初音が出ることゝためらっているのだろうか。

【語釈】 ●うき世ならぬを―【参考】 本歌の「つらい世の中」を踏まえる。●いでがてに―出ることができると
いう意の「いでかつ」。これに打消の助動詞の古い連用形「に」で、出ることをためらう。出ていきがたい。

【参考】 本歌「うき世にはかどさせりとも見えなくになどか我が身のいでがてにする」(『古今集』雑下・九六四・「つかさ解けて侍りける時よめる」・平定文)

七八 なべて待つ里わきかねてほととぎす中音をやらしわぶらむ

【合点】 善成

【詞書】 七六番歌「待郭公」を受ける。

【口語訳】 総じて待つている里を区別しかねて、ホトトギスはなまじつか鳴きかねているのだろう。

【語釈】 ●なべて―おしなべて、概して。●音をやらしわぶらむ―鳴き声を漏らしづらいのだろう、の意。

【参考】 「なべて世にまたるる比の時鳥さぞしのびねはもらしかぬらん」(『新拾遺集』夏・二〇八・「貞和二年百首歌奉りし時」・藤原為明)

岡郭公

七九 岡辺なるまつにつれなき日数へいつともわかぬほととぎすかな

【合点】 善成

【詞書】「岡の郭公」。『千首』題。

【口語訳】 岡のほとりにある松ではないが本当は心待ちにしていたのに、そしらぬふりして日数を過ごしていつ鳴くとも分らないホトトギスだな。

【語釈】 ●まつ―「松」と「待つ」とを掛ける。

【参考】「ほととぎす来鳴きとよもす岡辺なる藤波見には君は来じとや」（『万葉集』卷十・夏相聞・一九九一）

【補説】万葉歌の第五句「君は来じとや」と訪れない恋人をホトトギスに重ねて詠じた。

百首歌よみ侍るとて

八〇 音をしのぶ心もたへじほととぎす村雨わたる夕暮の空

【合点】 良基

【詞書】「百首歌を詠みました、とって」。百首歌の詠歌年時は未詳。

【口語訳】 ホトトギスは鳴き声を包み隠している気持ちもこらえきれないだろう、にわか雨が通り過ぎてゆく夕暮れの空では。

【語釈】 ●音をしのぶ―鳴き声を包み隠す。「忍び音」は四月にまだ姿を見せずにホトトギスが鳴くこと。「音をしのぶ」という表現の他例はいずれも「螢という鳴かない虫に対して鳴き声を隠している」と詠んでいるが、当

該歌ではホトトギスに対していう。●たへじ―「堪ふ」の未然形に打消推量の「じ」。●村雨わたる―先行例は「雲かかる高ねのひばら音立てて村雨わたる秋の山本」(『玉葉集』秋下・七二六・宗尊親王)の他、管見に及ばない。
 【参考】「忍び音や君もなくらむかひもなき死出の田長に心かよはば」(『源氏物語』蜻蛉・薫)

初郭公

八一 時鳥たがためとてか待ちわぶるこの里遠く音をもらすらん

【合点】 為遠・耕雲

【詞書】 「初郭公」。

【口語訳】 ホトトギスは誰のためとって待ちわびているのか。この里から遠く離れて鳴き声を漏らすのだろう。

【語釈】 ●たがためとてか待ちわぶる―疑問の係助詞「か」と「待ちわぶる」の連体形で係り結びとなり、三句切れ。

【参考】 「時鳥五月待つ間にしのびきて心やすくや音をもらすらん」(『為家一夜百首』「五月郭公」・二四)

八二 過(ぎ)やらでしばし語へほととぎす待つとていづるはつなりせば

【合点】 為遠

【詞書】 八一番歌「初郭公」を受ける。

【口語訳】 通り過ぎることなく、少しの間でよいので語らっておくれ、ホトトギスよ。長い間待っていてようやく聞こえた初(音)なのだから。

【語釈】●過ぎやらで―「過ぎやる」は通り過ぎてしまふの意。「で」は打消の接続助詞。●第五句―本文は「はつなりせば」とあるが、「初音なりせば」と判断し、「ね（音）」を補って口語訳を付した。

【参考】「過ぎやらで語らふほどに時鳥聞くやいかにと誰に告げまし」（『自葉集』一一三・中臣祐臣）

郭公数声

八三 一声こゑをそれかとたどる雲かきまより重ねて名乗る時鳥かな

【合点】 为重・善成

【詞書】「郭公、数声」。『新後拾遺集』（夏・二〇一）に「上の男ども、郭公数声といふことをつかうまつりけるに」という詞書で義満の「幾声と数へむものを時鳥鳴きつとばかり何思ひけん」という歌がみえる。『晴月集』（夏・一五）には「永徳元年五月五日公宴和歌御会三首の中に、郭公数声」と見える。「数声」は二声三声の意。

【口語訳】 一声をそれかと辿ってみると、雲間から重ねて名乗っているホトトギスだな。

【語釈】 ●一声―たった一度、聞いた鳴き声。 ●重ねて名乗る―ホトトギスが繰り返し返し鳴いている様子。

【参考】「一声はさだかならずと思ふ間にかさねて名のる時鳥かな」（『菊葉集』夏・三五五・読人しらず）

雨中郭公

八四 つれづれのぐことやとふらむほととぎすは晴れぬながめの夕暮の空

【合点】 善成

【詞書】「雨中の郭公」。『千首』題。

【口語訳】 ホトトギスは物憂いのだろうと思つて訪れるのだろうか。晴れず長雨で物思いにふける夕暮れの空に。

【語釈】 ●つれづれの―物憂く寂しい気持ち。●ことやとふらむ―疑問の係助詞「や」と現在推量の助動詞「らむ」の連体形で係り結びとなり、二句切れ。●ながめ―「長雨」と「眺め」とを掛ける。

【参考】 「つれづれとながむる空の郭公とふにつけてぞねはなかけける」(『後撰集』夏・一八五)

〔雲外〕
曙郭公

八五 ほととぎす雲のほかなる一声こゑに又まどろまぬ空ぞあけゆく

【合点】 為重

【詞書】 本文は「雲外」をミセケチして「曙郭公」としている。いずれも『千首』題。「雲外」は雲のはるかかなた。

【口語訳】 ホトトギスの、雲のさらに彼方から聞こえる一声に、ふたたびまどろみもせず空が明けてゆく。

【語釈】 ●雲のほかなる―削除前の題「雲外」をそのまま和語にした表現。「ほととぎすききつとや思ふ五月雨の雲のほかなる夜半の一声」(『新勅撰集』夏・一七三・「題しらず」・慈円)。●一声―八三番歌【語釈】参照。●まどろまぬ―うとうとすることもできず。●空ぞあけゆく―強意の係助詞「ぞ」と「明け行く」の連体形で係り結び。夜が次第次第に明けてゆく様子を表す。題の「曙」を表現。

【参考】 「一声ノ山鳥、曙雲ノ外 万点ノ水蛭、秋草ノ中」(『和漢朗詠集』夏・一八二・「郭公」・許渾)、「宵の間はまどろみなましほととぎすあけてきなくとかねてしりせば」(『後拾遺集』夏・一八七・「題不知」・橘資成)

聞郭公

八六 たがためにこの里すぎてほととぎすいま一声こゑの遠とをざかるらむ

【合点】 善成

【詞書】 「聞く郭公」。

【口語訳】 ホトトギスは誰のためにこの里を過ぎてゆくのか、今一声が遠ざかってゆくことだろう。

【語釈】 ●いま一声―「一声」は八三番歌【語釈】参照。●遠ざかるらむ―「らむ」は未来の事態を推量する意。

【参考】 「おのが音はたがためとてもやすらはず鳴き捨ててゆくほととぎすかな」（『為定集』三二）

挿葵

八七 神まつるけふこそ見つれあふひ草なべてかけけるたのみなりとは

【合点】 善成

【詞書】 「挿かひす葵」。

【口語訳】 神事が行われる今日、必ず見るのですね。葵草を総じて掛けているのは神の恵みを期待しているためなのだと。

【語釈】 ●神まつる―賀茂祭を指す。●けふこそ見つれ―強意の係助詞「こそ」と強意の助動詞「つ」の已然形で係り結びとなり、二句切れ。●あふひ草―「あふひ」に「葵」と「会ふ日」とを掛ける。●かけける―「葵を」掛ける」と「頼みを」懸ける」とを掛ける。

【参考】 「神まつるけふのみあれのかざし草ながきよかけてわれやたのまむ」（『夫木抄』夏・二四七八・藤原資季）

菖蒲

八八 軒端葉なるあやめのつゆも玉だれの小簾こすの間まかけてかほをる今日かな

【合点】 花町

【詞書】 「菖蒲」。堀河百首題。

【口語訳】 軒端にある菖蒲にかかったほんの少しの露も玉でかざった簾のように小簾の隙間から薫る今日この日であるよ。

【語釈】 ●つゆも―「露」と「つゆ（副詞）」とを掛ける。●玉だれのこすのま―露を玉簾に見立てる。『西京雜記』（二）に「珠を織りて簾と為す」とある「珠簾」を模した表現。

【参考】 「あやめふくかやが軒ばに風過ぎてしどろにおつるむらさめの露」（『玉葉集』夏・三四五・後鳥羽院）

廬橘

八九 袖かけて花橘たちばなはにほふなり代代むかしの昔むかしをなににうつさむ

【合点】 為遠・善成

【詞書】 「廬橘」。堀河百首題。

【口語訳】 袖に掛けて花橘は匂うようだよ。多くの年月を経た昔を何に移そうというのか。

【語釈】 ●袖かけて―【参考】 本歌を踏まえ、袖に香をたきしめての意。●花橘はにほふなり―強意の係助詞「は」と推定の助動詞「なり」の終止形とで係り結びとなり、三句切れ。●うつさむ―橘の香りを袖に「移す」の意と昔の人の面影を「映す」の意を掛ける。

【参考】本歌「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」（『古今集』夏・一三九・読人しらず）

廬橘驚夢

九〇 ほどもなき夜半よはを残のこして橘たちばなのかをほる枕まくらにいく寝覚ねざめしつ

【合点】なし。

【詞書】「廬橘、夢驚く」。『和漢兼作集』（四四八）に見える。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「昔の人の袖の香ぞすると、業平の朝臣の読みしより、橘の匂ひには昔を忍ぶとよめり。此の題の心、軒ちかきにはほひにおどろきて、短か夜の夢のさめやすきをいふなり。」とある。

【口語訳】残り短い夜半の時を残して橘が香る枕に幾夜目を覚ましたことか。

【参考】八九番歌参照。「橘のかをるあたりはほととぎす心してこそ鳴くべかりけれ」（『源氏物語』〈蜻蛉〉・匂宮）

【補説】当該歌では「驚」と「夢」を「まはして詠」んでいる。「夢」は多く題詠論で言うところの「必ず詠むべき文字」かと思われ、合点がない所以か。しかし「驚夢」を持つ題の中で『金葉集』（夏・一一五・「郭公驚夢といへることをよめる」・中納言実行）に「おどろかす声なかりせばほととぎすまだうつつには聞かずぞあらまし」（『和歌一字抄』「驚」七六四）という先行例もある。当該歌では「いく寝覚めしつ」で「短夜の夢が覚めやす」い点を表現している。【参考】に挙げた『源氏物語』〈蜻蛉〉に詠まれた匂宮が浮舟の死を知ってまさに夢心地で過ぎた折の様子を踏まえているか。作者の自讃歌である。

故郷橋

九一 ふるさとのいたまばらになるままになまになままでかほをる軒の橋

【合点】 善成

【詞書】 「故郷の橋」。

【口語訳】 故郷の板（屋）はまばらになるにつれて、寢室まで香ってくる軒の橋。

【語釈】 ●いたまばらに——「いたやまばらに」とあるべきか。「いたや」は「板屋」。板で葺いた屋根。「まばら」は隙間の多いこと。

【参考】 「まばらなる真木の板屋に音はしてもらぬ時雨や木の葉なるらん」（『千載集』冬・四〇四・「崇徳院に百首歌奉り時、落葉の歌とてよめる」・藤原俊成）

早苗

九二 賤しづの女めが早苗さなへひく手てやたゆからしたのもの御注連みしめながき日影に

【合点】 善成

【詞書】 「早苗」。堀河百首題。『為重朝臣詠草』（七二）康暦二年卯月（十二日）当座三十首で為重が出題。

【口語訳】 賤の女が早苗を引いている手がなんともだるそうだ。田の面に引いた御注連繩が長く引かれ、そのように長い日の光にあたって。

【語釈】 ●賤の女—庶民の女性。●早苗ひく手や—「早苗」は多く「早苗取る」と詠まれ、「引く」とする用例は他にない。「引く」は御注連繩の縁で詠んだか。「や」は疑問の係助詞。●たゆからし—「弛し」の連用形「たゆ

く」に「あるらし」が続いた「たゆくあるらし」の縮約形。だるいようだ。「らし」は「や」を受けて連体形となり、係り結びで三句切れ。賤の女の田植えを根拠として「たゆし」と推定している。●たのも―田の面。「頼む」の意を響かせるか。●御注連―田の周辺に引いた注連縄。●長き日影に―夏の長い日の光。「長き」は「御注連縄」と「日影」の両方にかかる。

【参考】「菖蒲ひく賤の袂やたゆからん尋ねかからぬましなければ」（『康資王母集』五七）、「時にあふ千町のなへも今よりや君が齡の数はとらまし」（『為重朝臣詠草』七一）

五月雨

九三 いかだ師しやよ避よきし岩間いはまを忘わするらんくだる瀬せやすき五月雨の比

【合点】 善成

【詞書】 「五月雨」。堀河百首題。

【口語訳】 筏師よ、避けた岩間を忘れたのだろうか。あつさりと瀬を下る五月雨の頃よ。

【語釈】 ●いかだ師―木材などを運搬する筏を漕ぐ人。●忘るらん―「らん」は原因を推量する助動詞。疑問の係助詞「や」を受けて連体形となり、係り結びで三句切れ。●くだる瀬やすき―舟が岩石の多い川上から、岩のない浅瀬の川下へ移動するのはたやすい。川上では岩石が多く漕ぐのに苦勞したが、岩の少ない川下では流れに乗って滞りなく舟を漕ぐ様子をいう。●五月雨―「さみだれは、五月のあめとかきたれば、五月に用ゐて四月六月には用ゐる」（『俊頼髓脳』）。なお九四番歌【詞書】参照。

【参考】「杣川や汀を下す筏師もなほ棹ささぬ五月雨のころ」（『自葉集』一一七・「嘉元三年庚申会に、河五月雨」）

杜五月雨

九四 岩代いはしろの杜もりの御注連みしめは朽ち果はててしづくぞたえぬ五月雨の比

【合点】 為遠・善成

【詞書】「杜の五月雨」。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「さみだれは日数程ふるものなれば、久しき心を読み。杜と出たらん、何国の名所をもよみて難有るべからず。」とある。

【口語訳】岩代の杜の御注連繩は朽ち果てて、滴が絶えない。五月雨の頃だ。

【語釈】●岩代の杜―「岩代（磐代・磐白とも）」は紀伊国の歌枕。現在の和歌山県日高郡みなべ町岩代。有間皇子が療養のため、紀伊国牟婁温泉に行った際に蘇我赤兄に唆され、謀反を企て、赤足に捕えられた。その送還の途次、藤白坂（和歌山県海南市）で絞殺されたという伝説を想起させる。●御注連―御注連繩。神域を占める。

●しづくぞたえぬ―強意の係助詞「ぞ」と打消の助動詞「ず」の連体形「ぬ」で係り結び。●五月雨―九三番歌

【語釈】参照。五月雨に晒され、物が朽ち果てると詠まれる。

【参考】「岩代の浜松が枝を引き結びま幸くあらばまたかへりみむ」（『万葉集』卷二・一四一・「有間皇子の自ら傷みて松の枝を結びし歌二首」）「岩代のもりのいはじと思へどもしづくにぬるる身をいかにせん」（『後拾遺集』恋四・七七四・題しらず・恵慶法師）

【補説】有間皇子の伝説を想起させることによって、岩代の杜が長い年月零に、また加えて長く降る五月雨に晒され、御注連繩も朽ち果ててしまったと詠む。

五月雨

九五 白露を玉とあざむくはちす葉も濁りにしづむ五月雨の比

【合点】 為重・善成

【詞書】 九三番歌参照。

【口語訳】 五月雨の頃は、白露を美しい石だと見せかけて、極楽浄土にある清纯な蓮の葉もまた濁っては沈む。

【語釈】 ●白露を―本文「しら露の」の「の」を見せ消ちし右傍に「を」と記す。●玉とあざむく―本文「玉しく池の」の「しく池の」を見せ消ちし右傍に「とあざむく」とする。これにより【参考】本歌の摂取が明確となる。「欺く」はだます。漢詩的表現と言われる（小島憲之『国風暗黒時代の文学』塙書房）。●はちす葉も濁りにしづむ―「清らかな蓮の葉もまた」と不確実なものを示す係助詞「も」を受けて「しづむ」は終止形。【補説】参照。

●五月雨の比―倒置となり、これを強調する。

【参考】本歌「蓮葉の濁りにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく」（『古今集』夏・一六五・「はちすの露を見てよめる」・僧正遍昭）

【補説】『法華経』湧出品「不レ染ニマラニ世間ノ法ニ、如シ蓮華ノ在ルガ水ニ」によりながら詠まれた本歌を踏まえるため、「玉しく池の」を「玉とあざむく」とした。

九六 五月雨の軒の板間の玉水はもるとも見えぬ苔の下露

【合点】 善成

【詞書】 九五番歌「五月雨」題を受ける。

【口語訳】五月雨の降る軒の隙間の玉のような雨だれは漏れるとも思われない、軒の板間に生えた苔の下露よ。

【語釈】●軒の板間―【参考】参照。●玉水―雨だれの美称。「玉水もしどろの軒のあやめ草五月雨ながらあくっていくよぞ」（『新拾遺集』雑上・一五七〇・「朝五月雨」・藤原定家）。●苔の下露―ここでは、軒の板間に生えた苔に置かれた露が板間の隙間から漏れ落ちることはない、と捉える。

【参考】「ふる里の軒の板間に苔むして思ひしほどはもらぬ月かな」（『平家物語』卷三・少将都帰・康頼入道）

九七 五月雨の晴れぬながめに慰むやとてもさびしき心なるらむ

【合点】良基

【詞書】九五番歌「五月雨」題を受ける。

【口語訳】五月雨が晴れることなく長く降り、物思いにふけて眺めていることに慰められますか、といってもやはりさみしい気持ちなのだろう。

【語釈】●ながめ―「長雨」と「眺め」とを掛ける。●慰むや―「慰む」は「慰み」の受身形で慰められるの意。

「や」は疑問を表す係助詞。●とても―格助詞「とて」に係助詞「も」。「といっても」の意。

【参考】「慰むもあと定まらぬながめかなそなたの空に迷ふ浮雲」（『親清五女集』三六〇）

夏草

九八 思ひなきわが身なりせばしげりあふ葎の宿やすみ憂からまし

【合点】善成

【詞書】「夏草」。永久百首題。

【口語訳】心が安らかな私であったならば、うつそうと繁り合う荒れた葎の宿は住みにくいでしょうね。

【語釈】●思ひなき―心配がない、の意。●わが身なりせば―「せば」は第五句の「まし」と呼応して、反実仮想を表す。●葎の宿―「葎」は蔓草の総称。「葎の宿」は葎の生い茂った、荒れた宿。●すみ憂からまし―住み心地が悪いだろうに。心配事の多い我が身なので、葎の生い茂る荒れた宿に住むことが似つかわしい。

【参考】「とふ人も思ひたえたる山里のさびしきなくはすみうからまし」（『山家集』中・九三七）

庭夏草

九九 花見んと植^{うへ}ゑし籬^{まがき}は埋^{うづ}もれてあたりの草ぞなほし^をげりぬる

【合点】為遠

【詞書】「庭の夏草」。『千首』題。

【口語訳】花を見ようと植えた籬は埋もれて、そのあたりには草がいつそう生い茂ってしまった。

【語釈】●埋もれて―花を見ようとしたところから時が経ち、夏草が生い茂る様子を表す。酒井茂幸「二条派和歌の表現方法―「うづもれて」の詠作史から―」（『和歌文学研究』七八・一九九九年六月）参照。●草ぞなほしげりぬる―強意の係助詞「ぞ」を受ける助動詞「ぬ」は連体形となり、係り結び。「ぬ」は自然の推移を表し、埋もれた籬の周辺の夏草が「なほ」（ますます）生い茂ることを表現。

【参考】「花見んと思はぬしばの籬をもうづむばかりにかかる朝顔」（『続重槐集』五七三・「籬槿」）

夏の歌の中に

一〇〇 塵ちりはらふ契やうとくなりぬらむ

【合点】 為重

【詞書】 「夏の歌を詠みました中に」。

【口語訳】 寝床の塵を払うというお約束もいつのことだったか疎くなってしまったようだ。

【語釈】 ●塵はらふ―恋人と疎遠になり、寝床の敷物に溜まった塵を払い、久しぶりに逢うという意。【参考】 後撰集歌参照。

【参考】 「夏の夜はあふ名のみして敷妙の塵払ふ間に明けぞしにける」(『後撰集』夏・一六九・「題しらず」・藤原高経)、「我ならで塵払ふべき人もなしただひとりねの床夏の花」(『文保百首』夏・二〇二三・頓覚)

【補説】 下句は現存せず。概本列帖装の折が二枚分欠落している部分にあったと思われる。

一〇一 夕立のよわると聞けば鳴る神の音も雲井に遠ざかりつつ、

【合点】 なし。

【詞書】 歌題は欠落している。一〇〇番歌 【補説】 参照。「夕立」に関する題かと思われる。

【口語訳】 夕立の雨脚が弱まったと思うと、雷の音も遠くの空に遠ざかってゆくよ。

【語釈】 ●夕立―夏の夕方に急に雲が立ち短い時間で激しく降る大雨。●聞けば―雨音から推測して夕立が弱まっただろうと思う、の意。これを契機として下句の件が継続することを表す。

【参考】 「鳴る神の音はそこもなかりけりくもれる方や夕立のそら」(『新千載集』夏・二九八・「後醍醐院御時武者

所に侍りけるに題をたまはりて歌つかうまつりける時、夕立・平氏村)

【補説】 一〇〇番歌の下句を含む複数首とともに詞書も欠落したと考えられる。

一〇二 雲晴るる日影はもとの空ながら吹く風すずし夕立のあと

【合点】 為重

【詞書】 詠歌内容から一〇一番歌の歌題を受けると思われる。なお、一〇一番歌【詞書】参照。

【口語訳】 雲が晴れて日差しはこれまでと変わらない空だが、吹く風は涼しくなった、夕立の後には。

【語釈】 ●雲晴るる―夕立を降らせた雲が晴れて。●日影はもとの空ながら―「日影」は陽光。「ながら」は逆接の確定条件を表す。「もとの空」は「月やあらぬ春は昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして」(『古今集』恋五・七四七・在原業平)に倣った表現。日の光は、これまでと変わらない空だけでも、夕立の後の風は涼しく変化した、という。

【参考】 「涼しさの音を残して吹く風によそに過ぎ行く夕立の雲」(『大山祇神社百首和歌』夏・二九・「夕立」・源頼之)

一〇三 夏の日のかたぶくほどに雲晴れて名残すずし夕立の空

【合点】 為重・耕雲

【詞書】 一〇二番歌【詞書】参照。

【口語訳】 夏の日差しが西に沈みかけるころになって雲は晴れて、その名残が涼しい夕立の空よ。

【語釈】 ●名残すずしき―『源氏物語』(紅葉賀)で光源氏が「夕立して、名残涼しき宵のまぎれに運明殿のわた

りただずみ歩」いていると源典侍が琵琶を奏でているという場面が描かれる。夕立の名残りが涼しい空、の意。

【参考】「しばし猶もとの日影になりやらでなごりすずしき夕立のそら」(『文保百首』夏・二六二九・津守国冬)

納涼

一〇四 常盤山木ずゑの蝉こゑの声なくは夏をもわかじ松の下風

【合点】花町

【詞書】「納涼」。

【口語訳】常盤山は梢の蝉の声がもし聞こえなかつたら、夏だと分かるまい。松の下風の涼しさで。

【語釈】●常盤山―山城国の歌枕。現在の京都市右京区常盤付近の丘をさす。●声なくは―「なくは」は順接仮定表現。形容形「なし」の未然形に接続助詞「は」、あるいは連用形に係助詞「は」と考えられる。【参考】千里歌を踏まえた表現。●夏をもわかじ―「じ」は打消推量の意、終止形。夏であるということをも分からないだろう、の意。

【参考】本歌「鶯の谷よりいづる声なくは春くることをたれかしらまし」(『古今集』春上・一四・大江千里)。「此ままに秋をも知らじ常盤山夏こそなけれ松の下風」(『草庵集』四〇二・「等持院贈左大臣家五首、納涼」)

翫

一〇五 夏の夜は鎖ささでのみ寝る榎まきの戸をいかで水鶏くひなのなほ叩たたくらむ

【合点】善成

【詞書】「翫」。水鶏。永久百首題。

【口語訳】夏の夜は錠を鎖さないで寝る槿の戸を、どうして水鶏は叩くのだろうか、すぐ開くようにしているから叩く必要はない。

【語釈】●夏の夜は鎖さでのみ寝る槿の戸を——「槿の戸をささでもあけぬ夏の夜のうたたねにのみ月をみしまに」(『宝治百首』夏・一〇七八・弁内侍)のように槿の戸を閉ざす間もなく開けてしまう夏の夜の短さを表現。「槿の戸」は「君や来む我や行かむのいさよひに槿の板戸もささず寝にけり」(『古今集』恋四・六九〇・よみ人しらず)のように恋歌に見られる。●いかで——反語の意。●なほ叩くらむ——「なほ」は依然として。「らむ」は現在推量の意。水鶏(クイナ)の「こっこっこ」という鳴き声が戸を叩く音に似ていることをいう。

【参考】「槿の戸もささでやすらふ月かげになにをあかずと叩く水鶏ぞ」(『新勅撰集』雑一・一〇六〇・紫式部)

夏祓

一〇六 あさの葉のゆふしでなくは秋風のことよひはなにに通かよひそめまし

【合点】良基

【詞書】「夏祓」。堀河百首題では「荒和祓」と表記。

【口語訳】もし麻の葉の木綿を垂らさないのならば、秋風が夏祓の今夜は何に吹き通り始めるのだろうか。木綿四手に風が吹いている。

【語釈】●あさの葉のゆふしで——夏祓の神事で用いる麻の葉に木綿で作った幣を付ける。木綿四手があるので風が吹き通っていることが分かる。●なくは——一〇四番歌【語釈】参照。●通ひそめまし——「まし」は仮定の意の

「なくては」を受け、反実仮想。もし木綿がなかったならば、秋風はどこを吹き通り始めるのだろうか。

【参考】「褌するあさの葉末のなびくより人の心にかよふ秋風」（『新千載集』夏・三〇八・「宝治二年百首歌奉りける時、六月祓」・俊成女）

秋歌

早秋

一〇七 夏衣なつころもう「す」き袂たもとに通かよひきてたつことやすき秋の初風

【合点】善成

【詞書】「早秋」。秋の初め。初秋、の意。

【口語訳】暑かった夏に着ていた衣の薄い袂に、吹いてきて、その衣を裁つことはたやすいといわんばかりにその訪れを告げる、秋の初風よ。

【語釈】●夏衣―「うすし」「たもと」「たつ（裁つ）」は夏衣の縁語。●うすき―本文「す」は右傍に補入。●たつことやすき―『古今集』（春下・一三四・凡河内躬恒）にも用例が見られる。「たつ」に「（秋が）立つ」と「（衣を）裁つ」とを掛ける。夏衣が薄いので秋風が通り過ぎることと裁つことが「やすし」とする。

【参考】「散り果てて花のかげなき木のもとにたつことやすき夏衣かな」（『新古今集』夏・一七七・「更衣をよみ侍りける」・慈円）

一〇八 かたしきの袖よりふかき露にまづ葎むぐらの宿やどの秋は来にけり

【合点】 良基

【詞書】 一〇七番歌「早秋」題を受ける。

【口語訳】 独り寝の涙で濡れた袖よりも深く置く露を見て、まず葎の生い茂った貧しい宿に秋は来たのだな。

【語釈】 ●かたしきの袖―自分の袖だけを敷いて寂しく独り寝をする。恋的要素を含む。●葎の宿―葎の生い茂った宿。貧しい荒れ果てた家。

【参考】「思ひあらば葎の宿に寝もしなむひしきものには袖をしつつも」（『伊勢物語』三段）

七夕雲

一〇九 心して雲くもの水脈みおをぞはやからし逢あふ瀬せをいそぐ天あまの河舟

【合点】 為重

【詞書】 「七夕の雲」。『為尹千首』（三二二）にも見える。

【口語訳】 気をつけて、雲が水脈をなして速く流れるらしい。七夕の逢瀬をいそぐ天の川舟よ。

【語釈】 ●心して―第五句「天の河舟」への呼びかけ。●雲の水脈をぞ―【参考】古今歌を踏まえた表現。雲が滲しみになして早く流れる。『新編国歌大観』では「くものみおこそ」とする。●はやからし―「早くあるらし」の約。「らし」は根拠のある推定の意の助動詞。係助詞「ぞ」の結びで連体形。

【参考】 本歌「天の河雲のみをにてはやければひかりとどめず月ぞながるる」（『古今集』雑上・八八二・読人しらず）

七夕

一一〇 七夕のまれなる中のつらさをも逢（ふ）夜やいとど思ひしるらむ

【合点】 為遠・為重・善成

【詞書】 「七夕」。堀河百首題。

【口語訳】 七夕の稀にしか逢えない間柄というつらさをも、その逢う夜にはひとしお思い知らされるのだろうか。

【語釈】 ●まれなる中―まれにしか会えない仲。ここでは七夕という機会にしか会えない間柄。【参考】 参照。

●下句―疑問の係助詞「や」と原因推量の助動詞「らむ」の連体形で係り結び。

【参考】 「七夕の恋ひやつもりて天の川まれなるなかの淵となるらん」（『続古今集』秋上・三一五・「弘長二年百首に、七夕を」・中務卿親王）

【補説】 会えないことをつらいと思っていたが、一年に一度の待ちかねていた逢瀬の七夕の夜も、その後の別れを思うとかえってつらさを思い知らされるといふ逆説的な表現が評価されたか。

一一一 七夕のたなばた五百いほはたしろも機衣をいかにしてかさぬるつまのをまどほをなるらんを

【合点】 善成

【詞書】 一一〇番歌「七夕」題を受ける。

【口語訳】 織姫が織った五百機衣はなぜ、重ねた褌のように逢えず、妻との逢瀬が間遠になるのだろうか。

【語釈】 ●五百機衣―織姫が多くの機はたで織ったという衣服。よって初句の「七夕」を織姫と解した。●つま―衣の縁語の「褌」と「妻」とを掛ける。

【参考】「七夕の五百機衣まねにきてかさねもあへぬつまやうらみん」(『新千載集』秋上・三四二・後伏見院)

七夕夜深

一一二 更ふけにけりうらめづらしきたなばたの雲こもの衣よの夜半よはの秋風

【合点】 善成

【詞書】「七夕、夜深ふけぬ」。『菊葉集』(秋上・四七四・よみ人しらず)に「七夕夜深といふことを」と見える。

【口語訳】夜が更けてしまったな。すがすがしい織姫の雲の衣を纏わせる夜の秋風はそう思わせるよ。

【語釈】●更けにけり―題の「夜深」を表現。初句切れ。●うらめづらしき―心に珍しいと思う。清新に感じて心ひかれるさまである。「うら」に「衣」の縁語で「裏」を掛ける。●雲の衣―雲を織姫の衣に見立てる。「雲衣ハ范叔ガ羈中ノ贈 風櫓ハ瀟湘ノ浪上ノ舟」(『和漢朗詠集』秋・三二三・具平親王)。『万葉集』(第十・秋雑歌・二〇六三)にも用例を見る。

【参考】「わがせこが衣のすそを吹き返しうらめづらしき秋の初風」(『古今集』秋上・一七一・読人しらず)

七夕後朝

一一三 帰る「さ」はいそがぬ天あまの川舟かはふねに心ひとつのなにこがるらん

【合点】 善成

【詞書】「七夕の後朝」。永久百首題。

【口語訳】帰り道は急がずにいる天の川舟なのに、自分の考え一つその心で舟を漕ぐということではないが、何

を思い焦がれているのでしよう。

【語釈】●帰るさは—本文「さ」は右傍に補入で示される。逢瀬の帰り道。●心ひとつの—自分の考え一つ。恋しいあの人と共にいたいということ。●こがるらん—川舟の縁語の「漕がる」と、恋人を思い「焦がる」とを掛ける。

【参考】「伊勢の海につりする天のうけなれや心ひとつを定めかねつる」(『古今集』恋一・五〇九・読人しらず)

【補説】「心ひとつ」は恋しい人と共に過ごすにはどうしたらよいか、【参考】に挙げた古今歌の「うけ(浮子)」のように揺れ動く、思い乱れる心をいうか。

萩

一一四 うちそよぎなびきもやらで萩の葉はのほかにわたる秋のはつ風

【合点】 良基

【詞書】「萩」。堀河百首題。

【口語訳】音を立ててそよぎ靡くこともなく萩の葉にわずかに吹き渡っている秋の初風よ。

【語釈】●なびきもやらで—風になびく萩の葉は音を立てると詠まれるが、「やらで」と打ち消したところに特徴がある。●萩の葉のほかにわたる—「萩の葉」は広く大きな葉であり、それに風が吹き秋の気配を感じ取る。

【参考】「葦辺なる萩の葉さやぎ秋風の吹き来るなへに雁鳴き渡る」(『万葉集』卷十・二二三八・作者未詳)、「秋風の吹くにつけてもとはぬかな萩の葉ならば音はしてまし」(『後撰集』恋四・八四六・中務)

一一五 萩の葉の音うちそよぐほどよりも身にしみまざる秋の夕風かぜ

【合点】 為遠

【詞書】 一一四番歌「萩」題を受ける。

【口語訳】 萩の葉が音を立てそよぎ秋の到来を告げている、それよりも、いつそう私の身にしみる秋の夕風よ。

【語釈】 ●萩の葉の音―「吹く風のしるくもあるかな萩の葉のそよぐなかにぞ秋は来にける」(『貫之集』第 四・五二二) のように、萩の葉を吹く音は秋の到来を告げるもの。一一四番歌【語釈】参照。●身にしみまざる―秋の寂しさを一層強く感じる。●秋の夕風―萩の葉と私の身に吹く風。

【参考】「夕されば野べの秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里」(『千載集』秋上・二五九・藤原俊成)

一一六 それとなき眺めはよその夕べにて軒端の萩に秋風ぞ吹く

【合点】 なし。

【詞書】 一一四番歌「萩」題を受ける。

【口語訳】 何ということもない眺めは私とは関わりのない夕暮れの景色であって、軒端の萩には秋風が吹いている。

【語釈】 ●それとなき―それだと決まったものがあるわけではない。用例は少なく、勅撰集では『風雅集』と『新統古今集』に一首ずつ見える。その他は伏見院の用例などが見える。●よその夕べ―【参考】に挙げた定家の歌を踏まえた表現。【補説】参照。●秋風―「秋」に「飽き」の意を響かせる。

【参考】「年もへぬ祈る契は初瀬山をのへの鐘のよその夕暮」(『新古今集』恋二・一一四二・藤原定家)

【補説】合点がないので自讃歌。「よそのゆふべ」は定家の第五句を踏まえたものであろう。「自分以外のよその男女が逢う夕暮」に吹く秋風には「飽き」を響かせて四季歌に恋的要素を存分に込めた。

江辺暁萩

一一七 とまりぶね波は音なき湊江になほ夢さそふ萩の上風

【合点】善成

【詞書】「江の辺りの暁の萩」。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「萩にはわきて風の音するものなれば、先づその心をよめり。下萩、萩の上風、萩の上葉、萩の声、萩吹く風、庭の萩原などよめり。江辺を出たれば、其の風情をもとむべし。」とある。

【口語訳】停泊している舟の中では波の音は聞こえず、湊江にやはり夢にいざない眠りを誘う萩の上風が吹く。

【語釈】●とまりぶね―碇を下ろすなどして停泊している舟。●湊江―港になっている入り江。●夢さそふ―「暁」を「まはし」て詠んだ表現。

【参考】「夢さそふ風のやどりと成りにけり枕にちかき庭の萩はら」（『新統古今集』秋上・三六九・「貞和百首歌に」・藤原為明）

萩露

一一八 枝ながらながめむ露の玉ゆらもなほとどまらぬ萩の下風

【合点】良基

【詞書】「萩の露」。『為重朝臣詠草』（一七三番歌）康暦二年七月七日の歌会で出題。

【口語訳】枝についたまま眺めよう、美しい露がほんの少しの間もやはり留まることのない萩の下の方に風が吹く。

【語釈】●枝ながら―「ながら」はそのままの状態で、の意。露が枝に付いた状態で。【参考】古今歌を踏まえる。

●玉ゆら―ほんのしばしの間の意。「玉」は露の見立てであり、縁語。露の美しさを表現。

【参考】「萩の露玉にぬかむと取れば消ぬよし見む人は枝ながら見よ」（『古今集』秋上・二二二・読人しらず）

【補説】【参考】古今歌は露が玉であれば緒を通してゆつくり鑑賞するけれど、取ろうとすれば消えてしまうとい、当該歌ではこれを踏まえて、萩の葉に下風が吹くのでしばしもとどまることがないので、古今歌のように「枝ながら」眺めようという。

一一九 散らぬまも色なる露を吹く 風に花かと惜しむ野辺の秋萩

【合点】 為遠・善成

【詞書】 一一八番歌「萩露」題を受ける。

【口語訳】 散らないうちも萩の花の色をつけた露を吹く風に花ではないかと惜しく思う、野辺に咲く秋萩の花を。

【語釈】 ●花かと惜しむ―萩の花に置いた露に萩の花の色が移り露を花と見まがい、風が吹き露を吹き飛ばすと、花を吹き散らしたのではないかと惜しまれるという。

【参考】「我が宿の萩咲きにけり散らぬ間にはや来て見べし奈良の里人」（『万葉集』卷十・二二八七・秋相聞、『古今和歌六帖』第五・二八四五）

草花露

一一〇 のちも見^みむ風を待つ^ま間のしら露にうつりなはてそ秋萩の花^{はな}

【合点】 為遠

【詞書】 「草花の露」。

【口語訳】 のちも再び見よう。風が吹くのを待つ間を知らない、白露にその色を移してしまわないでおくれ、秋萩の花よ。

【語釈】 ●のちも見む―初句切れ。秋萩を露が吹き落とされた後も見たいという気持ち。●風を待つ間の―【参考】に挙げた本歌を踏まえた表現。●しら露―「しら」に「白（露）」と「知ら（ぬ）」とを掛ける。●うつりなはてそ―「白露」の「白」に秋萩の花の色を移すなよ。「な：そ」は禁止の表現。「うつりなはてそ」という例は当該歌以前では「残りける秋の日かずもあるものをうつりなはてそ庭のしら菊」（『続千載集』秋下・五六七・永福門院内侍）などがある。

【参考】 本歌「宮城野のもとあらの小萩露を重み風を待つごと君をこそ待て」（『古今集』恋四・六九四・読人しらず）

露

一一一 宮城野や風を待つ^ま間のつゆにだに小萩^{こはぎ}が原^{はら}ぞ色かはりゆく

【合点】 善成

【詞書】 「露」。堀河百首題。

【口語訳】 宮城野では風を待っているほんの少しの間とどまっている露にさえも、小萩が一面に生えた野原は色

が萩の花の色に変わってゆくのだよ。

【語釈】 ●宮城野や―陸奥国の歌枕。現在の宮城県仙台市に同名が残る。「や」は地名を提示する間投助詞。

●つゆ―歌題の「露」と副詞「つゆ（ほんの少しの間、の意）」とを掛ける。●小萩が原ぞ色かはりゆく―「小萩が原」は一面に小萩が生えた野原のこと。「かはりゆく」は強意の係助詞「ぞ」を受けた連体形で係り結び。その色が次第に移り変わるとする。

【参考】本歌、一二〇番歌【参考】参照。

潤月七夕

一二三 年に待つまふなでやいかに天あまの河文ふ月のけふは又もきにけり

【合点】善成

【詞書】「潤月の七夕」。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「(略) 潤月と出たるにはあふせなき事を詠ずるなり。」とある。

【口語訳】一年に一度の機会を待っている、天の川を渡るその船出はどのようなものであろうか、潤月で文月の今日七夕はまた(二度目)もやってきたよ。

【語釈】 ●年に待つ―「年に」は一年の間。「天の川遠き渡りはなけれども君が舟出は年にこそ待て」(『万葉集』卷十・秋雑歌・二〇五五)などの用例がある。●ふなでやいかに―「ふなで」は七夕が天の川を渡る事。「や」は疑問の意の係助詞。「いかに」は副詞で、どのように、の意。逢瀬はないのに、という意を含ませるか。

【参考】「七夕は文月の浪に舟出して天の川風今や待つらむ」(『嘉元百首』秋・一四二七・「七夕」・藤原俊光)

秋風満野

一一三 そことなき尾花の浪のよせかへりかたも定めぬ野辺の秋風

【合点】 善成

【詞書】「秋風、野に満つ」。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「(略)秋のけしきあらしによりて、千種の色を吹きしをらる、軀を惜しみてよめるなり。此の古歌則此の題の大意なるべし。満といふ字よく心をつくべし。」とある。

【口語訳】そこだよということはないけれど、尾花が靡いて波のように寄せては返し、方向を定めることのない野辺の秋風であるよ。

【語釈】●よせかへり―尾花が寄せては返す波のように風に吹かれている。「浪」の縁語。●かたもさだめぬ―一定方向ではなく四方八方に吹き乱れる尾花を表現することにより、野辺に秋風が満ちていることを表し、歌題の「満」を「まはし」て詠んでいる。「かた」に波の縁語の「瀉」を掛ける。

【参考】本歌「風ふけば方も定めず散る花をいづ方へゆくはるとかは見む」(『拾遺集』春・七六・紀貫之)

野虫

一二四 常盤山すその原にうらむなり秋風すさむ松虫の声

【合点】 善成

【詞書】「野虫」。『千首』題。

【口語訳】常盤山の裾野の原で恨みに思っているのだな。秋風が吹き荒れるなか松虫の声が聞こえるよ。

【語釈】●常盤山—山城国の歌枕。現在の京都市右京区常盤にある丘の辺りを指す古称とされる。ここでは永遠に変わらないという意味を込めている。●裾野の原にうらむなり—「裾野の原」は山裾に広がる原。「裾（野）」に「（衣の）裾」を、「うらむ」に「（衣の）裏」を響かせ、恋人の姿を想起させるか。三句切れ。●秋風—「秋」に「飽き」を響かせる。●松虫の声—「松虫」の「松」に「（恋人を）待つ」を響かせる。

【参考】「忘らるるときはの山も音をぞ鳴く秋のの虫の声に乱れて」（『大和物語』百六段）

草虫

一二五 そのままに虫の音しげくなりけりはらはですぎし庭の夏草

【合点】善成

【詞書】「草の虫」。

【口語訳】以前あった前栽も繁ったそのまままで虫の音も繁くなったなあ。その繁った草を払うことなく時が過ぎてしまった庭の夏草は。

【語釈】●そのままに—【参考】古今歌の詞書を受ける。●しげく—「（虫の音が）繁し」と「（夏草が）繁し」とを掛ける。●なりにけり—庭に繁った夏草の中から虫の音がしきりに聞こえるようになった事実を受け入れる。三句切れ。●払はで過ぎし—「秋ノ庭ニハ不レシテ掃携ニハテ藤杖ニ 閑ニ踏ニ梧桐ノ黄葉ニ行ク」（『和漢朗詠集』秋・三〇九・「落葉」・白居易）のように秋の庭を掃くことなく閑かに過ごす意が込められているか。

【参考】『古今集』（哀傷・八五三・三春有助）「君が植ゑし一叢薄虫の音のしげき野辺ともなりにけるかな」は次のような長文の詞書を載せる。「藤原の利基の朝臣の右近中将にてすみ侍りける曹司の身まかりてのち人も住ま

なりにけるを、秋の夜ふけて、物よりまうできけるついでに見入れければ、もとありし前栽もいと繁くあれたりけるを見て、はやくそこに侍りければ昔を思ひやりてよみける」

【補説】初句「そのままに」と下句は、【参考】古今歌の詞書にある「もとありし前栽もいと繁くあれたりける」を受けている。「払はで過ぎし」は【語釈】にも記したとおり、静寂を表す白居易の表現を取り込み、上句の「虫の音しげく」と対比する表現となっている。

右馬頭入道道源家にて、野径虫

一一六 わけ行(け)ばおなじあたりに鳴く虫もかぎりしられぬ武蔵野の原

【合点】 為重

【詞書】「右馬頭入道道源」は、『花宮三代記』永和元年八月二十五日条の幕府和歌会始に「沙弥道源」とあり、この右傍に「吉見右馬頭入道」と注記が見える。『大日本史料』では『花宮三代記』の「道源」を「氏頼」と注する。経氏の活動時期などを考慮し、氏頼を想定する。氏頼は生没年未詳。吉見頼隆の子。貞和四年(一三四八)ごろ能登の守護。応安三年(一二七〇)室町幕府引付頭人。歌題は「野の径の虫」。

【口語訳】わけ行ってみるといつも同じ辺りで鳴いている虫も、その場所の限りが分からないほど広い武蔵野の原だよ。

【語釈】●かぎりしられぬ武蔵野の原―「武蔵野」は武蔵国の歌枕。広義には関東平野全体を、狭義には現在の東京西部、府中の多摩川から川越の入間川に囲まれた部分を指す。「武蔵野は月のいるべき峰もなし尾花が末にかかる白雲」(『続古今集』秋上・四二五・「建保三年内裏の歌合」・源通方)のように広大な武蔵野の平原が広がって

いる様子を表現。

【参考】「ゆけど猶はてこそなけれ迷ひこし恋路の末や武蔵野の原」（『頓阿百首A』六八・「寄原恋」。「わけゆけばさまざまに鳴く虫の音もはてこそなけれ武蔵野の原」（『キヤウ内侍集』六五・「野径虫」、井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町後期』明治書院によれば『キヤウ内侍集』は姉小路基綱女卿内侍済子の歌集である可能性が指摘される）。

鹿

一一七 山鳥の尾上へだつるつまごひに長き夜すがらしかぞ鳴くなる

【合点】 善成

【詞書】「鹿」。堀河百首題。『為重朝臣詠草』（二一〇）康暦二年八月十二日歌会で出題。

【口語訳】山鳥の長い尾が尾上を隔てて恋しいあの人を慕う、その長き終夜、鹿がはつきりと鳴いている。

【語釈】●山鳥の尾上―「山鳥の）尾」と「山の）尾上」とを掛ける。「長き」を導き出す。●しかぞ鳴くなる―歌題の「鹿」と「しか（確と）」とを掛ける。強意の係助詞「ぞ」と鹿の声という聴覚により状況を把握するという意を持つ「なり」の連体形で係り結び。

【参考】「山鳥の尾上の鹿のおのれさへ隔つる中につまよこふらん」（『草庵集』秋上・五〇〇）

一二八 おのがつま松吹（く）風にたぐふなりくるる山路のさをしかの声

【合点】 善成

【詞書】一二七番歌「鹿」題を受ける。

【口語訳】自分の恋しい相手を待つのと、松を吹く風に相まっているのだな。暮れていく山路で小牡鹿の音が聞こえる。

【語釈】●おのがつま―鳴いている小牡鹿が相手を恋うこと。●松吹く風―「松」と「待つ」とを掛け、恋人の訪れを待つがやっこない寂しさを松吹く風に込める。●たぐふなり―「たぐふ」は添うの意。小牡鹿のつま恋の哀愁を帯びた声が「松吹く風」の音と同時に発生している。三句切れ。

【参考】「奥山の松吹く風にたぐひきて軒ばに近きさを鹿の声」(『新葉集』秋上・二九〇・入道前関白左大臣〈藤原教基か〉)

一二九 秋風につれなき色やならふらんつまつ山にしかぞ鳴くなる

【合点】 為重

【詞書】 一二七番歌「鹿」題を受ける。

【口語訳】秋風が吹き、様変わりしていくつれない様子にならったのだろう。恋しいあの人を待つ松山で鹿が鳴いている。

【語釈】●秋風―「飽き」を響かせる。●つれなき色やならふらん―「松ならでつれなき色とみゆるかな冬の林に降れる白雪」(『龜山院御集』秋・五九)などのように変化する色や様子を表す。「つま」の心変わりの意も込める。疑問の係助詞「や」に「ならふ」の連体形で係り結び。三句切れ。●まつ山に―「松山」は松が多く生い茂る山。「まつ」に「松」と「待つ」とを掛ける。「に」は場所を表す助詞。●しかぞ鳴くなる―一二七番歌【語釈】参照。

【参考】「秋風の吹きぬる野辺になく鹿は色かはり行く妻やこふらん」(『藤葉集』秋・二〇七・「秋歌中に」・近衛家基)

野径鹿

一三〇 旅人の行(き) 来もしらず鳴く鹿の声はるかなる武蔵野の原はら

【合点】 なし。

【詞書】 「野の径の鹿」。『夫木抄』(秋三・四八四四・従三位忠兼卿)に「野径鹿、古来歌合」と見える。他、『光経集』(五三三)に見える。

【口語訳】 旅人が往来するの知らないで鳴いている鹿の声が遙か遠く、広い武蔵野の原に聞こえる。

【語釈】 ●はるかなる―鹿の鳴き声が遙か遠くから聞こえるという意と広大な武蔵野の平野が遙か遠くまで広がっているという意を込める。●武蔵野の原―一二六番歌【語釈】参照。

【参考】 「めぐりあはん空行く月の行末もまだはるかなる武蔵野の原」(『拾遺愚草』一八五五・「野径月」)「旅人の袖うち払ふ秋風にしをれて鹿の声ぞ聞ゆる」(『後鳥羽院御集』一四六〇)

秋夕

一三一 秋の色のむなしき空にわが心こころいかにそめぬる夕なるらむ

【合点】 良基

【詞書】 「秋の夕べ」。『為重朝臣詠草』(一九三番歌) 康暦二年七月二十六日で出題。

【口語訳】 秋の気配の、何もない空のように空虚な私の心をどんなにか深く色を染め、思いを寄せ始めた夕べなのだろう。

【語釈】 ●秋の色―秋のけはいのこと。●むなしき空―何もない空。虚空。私の虚無な心を表現。●いかに―感

嘆の意の副詞で解釈した。●そめぬる―「染め」は下二段動詞の連用形で夕陽の色を染める、と（心を）深く寄せるの両意。「ぬる」は起動相の意を持つ助動詞「ぬ」の連体形。深く心を寄せ始めた。●夕なるらむ―「なるらむ」は断定の助動詞「なり」の連用形に現在推量の助動詞「らむ」が接続。

【参考】「夕暮れはいかなる色のかはればかむなしき空に秋のみゆらん」（『続古今集』秋上・三六四・藤原教家）

待月

一三二 月にうき物とは見えずいでやらぬ光をうつす山の端はの空

【合点】 為重

【詞書】 「待つ月」。

【口語訳】 煩わしいものとは思えない。すっかり出きらない月の光をうつす山の端の空を。

【語釈】 ●月にうき物とは見えず―「うき物」は、「（月が空に）浮き」と「憂き」とを掛ける。月に対して厭わしいものとは思わない。三句切れ。●いでやらぬ―月が山の端からすっかり出ることなく。

【参考】 「山の端を出でやらぬよりかげ見えて松の下照る十六夜の月」（『玉葉集』秋下・六三二・藤原良教）

【補注】 月影をうつすだけで、月の姿を見せない山の端の空をいとわしくは思わない、とする。その理由は月を待っているからである。歌題の「待つ」を「まはし」て詠んでいる。

一三三 月待つと高嶺たかねの雲をいとふまとに外山とやまのよそは影ぞさやけき

【合点】 良基

【詞書】一三二番歌「待月」題を受ける。

【口語訳】月の出を待っていると高嶺にかかっている雲を厭わしく思う、その間に外山から遠いところは月の光がはつきりとしている。

【語釈】●高嶺の雲—高い峰に懸かる雲。●外山のよそは—「外山」は人里に近く山からは遠いところ。「よそ」はかけ離れたところ。●影ぞさやけき—「影」はここでは月の光。「さやけし」は月の光が澄みきってすがすがしい様子。係助詞「ぞ」を受け連体形で係り結び。

【参考】「秋の月高嶺の雲のあなたにて晴れゆく空のくるるまちけり」（『千載集』秋上・二七五・藤原忠通）

月出山

一三四 いつのまにかへる尾上おのへの雲きえて暮くるれば月の澄すみのぼるらん

【合点】なし。

【詞書】「月、山を出づ」。

【口語訳】いつの間にか帰る尾上の雲が消えて、夕暮れになると月が澄んで昇るだろう。

【語釈】●いつのまに—「雲きえて」に掛かる。●かへる尾上—「尾上」は山の高い頂。「かへる」の主語は月。

●暮るれば—「暮る」の已然形に順接の接続助詞「ば」で夕暮になるとかならず、の意。

【参考】「待ちいでぬ麓の里もなかりけり尾上の月や澄みのぼるらん」（『草庵集』秋上・五一八）

月

一三五 今夜さへいづくにくもるかげならむ月のよそなる雲の一むら

【合点】 為遠・善成・耕雲

【詞書】 「月」。堀河百首題。『為重朝臣詠草』（二二一）の康暦二年八月十二日歌会で出題。

【口語訳】 今夜でさえもどこで曇っている光だというのだろう。月とはかけ離れて一叢の雲が浮かんでいる。

【語釈】 ●今夜さへ―「さへ」は添加の意。【詞書】に記したように経氏が康暦二年八月十二日の歌会で詠んだとするならば、「今夜」は「十五夜ではない今夜までも」の意となるか。●かげならむ―「む」は推量の助動詞の終止形で三句切れ。●月のよそなる―月とは遠く離れている。

【参考】「葛城や高間の山の花ざかり雲のよそなる雲を見るかな」（『千五百番歌合』春三・二百六番・左・四二一・有家）

一三六 さそはれて月にかかれる浮雲もやがて晴れゆく夜半の秋風

【合点】 花町・耕雲

【詞書】 一三五番歌「月」題を受ける。

【口語訳】 月にかかっている浮き雲も、夜半に吹く秋風に誘われてすぐに晴れてゆくのだなあ。

【語釈】 ●さそはれて―浮雲が秋風に誘われて、の意。「やがて晴れゆく」に掛かる。

【参考】「心こそ行方も知らね秋風にさそはれ出づる月をながめて」（『続後撰集』秋中・三三二・「月の歌の中に」・藤原秀能）、「村雨のやがて晴れ行く山風に曇りもはてぬ月ぞさやけき」（『拾藻抄』二五三）。

【補説】朱書きで集付「新後拾遺」と記される。『新後拾遺集』秋上・三六〇番歌、月歌群に入集。

八月十五夜

一三七 今宵^{こよひ}しも更^ふけてさやけき月影^{つきかげ}にげに中空^{そら}の秋ぞしらるる、

【合点】なし。

【詞書】「八月十五夜」。永久百首題。『千首』題。

【口語訳】十五夜の今宵に限って更けては清かに光る月の光に、まことに仲秋の名月であるすばらしい秋だと分かるのだ。

【語釈】●今宵しも―「しも」は八月十五夜という宵をとりたてていう。●中空の秋―「中空」は空の中ほどの意であるが、「中」に月の半ば、仲秋の意を響かせる。●秋ぞしらるる―強意の係助詞「ぞ」と自発の意の助動詞「る」の連体形で係り結び。

【参考】「月はなほ中空高く残れども影薄くなる有明の庭」(『風雅集』秋下・六三三・藤原経顕)

深夜月

一三八 更^ふけぬとは又おき出でて見る月^{つき}の影にもしるき夜半^{よは}の空かな

【合点】為遠

【詞書】「深き夜の月」。

【口語訳】夜が更けたのだということとはまた起きて出でて見る月の光にもはっきりと分かる夜半の空であるよ。

【語釈】 ●夜半の空―例えば「明けぬとも猶おもかげに立田山恋しかるべき夜はの空かな」（『拾遺愚草』二見浦百首・山・一九二）のように月がかかっている空。

【参考】 「世に知らぬ夜半の空かな秋毎にさゆるは月のならひなれども」（『長秋詠藻』中・二四四）

関路月

一三九 逢坂の関せきの清水にやどりきて空行く 月も影ぞやすらふ

【合点】 なし。

【詞書】 「関路の月」。

【口語訳】 逢坂の関の清水に宿ってきて空を行く月もその光をとどめる。

【語釈】 ●逢坂の関の清水―「逢坂」は近江国の歌枕。「関の清水」は逢坂の関にある湧き水。●空行く月―空を渡ってゆく月。●影ぞやすらふ―「やすらふ」はしばらくとどまる。「ぞ」を受けて連体形となり係り結び。

【参考】 「逢坂の関の清水に影見えて今やひくらん望月の駒」（『拾遺集』秋・一七〇・紀貫之）。

野月

一四〇 旅寝ねする涙にやどれ夜半よの月野原つぎの露は秋風ふぞ吹く

【合点】 善成

【詞書】 「野の月」。『千首』題。

【口語訳】 つらい旅寝で流す涙に宿っておくれ、夜半の月の光よ。野原の露には秋風が吹いて留まってくれない

から。

【語釈】●涙にやどれ―「やどる」の命令形。「夜半の月」に対していい、下句と倒置の関係。●野原の露は―野原の露は秋風によって吹き飛ばされてしまい、月の光を留めてはくれないので、と上句を説明する。●秋風ぞ吹く―強意の係助詞「ぞ」と「吹く」の連体形で係り結びとなり、露を吹き飛ばしてしまう秋風を強める。

【参考】「旅寝する野原秋風身にしめて面影さらぬ故郷の月」（『後鳥羽院御集』一六三六）

海辺月

一四一 ながむとて塩汲みたゆむ袖をだにほさでやあまの月やどすらむ

【合点】 為遠

【詞書】 「海の辺りの月」。

【口語訳】物思いにふけりぼんやりと塩汲みを怠っている袖でさえも干さずにいる海士の袖には、涙で濡れて月を宿すことだろう。

【語釈】●ながむ―物思いにふけり、涙を流し袖を濡らすことを想起。●たゆむ―緊張がゆるむこと。ここではぼんやりとして塩汲みを怠るさま。

【参考】「中中に塩汲みたゆむ海士人の袖やほすらん五月雨の比」（『壬二集』一二六九）

一四二 松浦瀉更けてかたぶく月影になほもちしの人や待つらむ

【合点】 善成

【詞書】一四一番歌「海辺月」題を受ける。

【口語訳】松浦潟では夜が更けて、すでに傾いている月の光にそれでも遠い異国の地の人を待つのだろう。

【語釈】●松浦潟―肥前国の歌枕。現在の佐賀・長崎両県の北西部。外国へと開かれた土地である。「松（浦）」に「待つ」を掛けることが多いが、ここでは第五句の「待つ」を導く。●もろこし―中国大陸の意。「はるかなるもろこしまでもゆく物は秋のねぎめの心なりけり」（『千載集』秋下・三〇二・大弐三位）のように遠い場所を表す。

【参考】「もろこしの山人今は惜しむらん松浦が沖の明け方の月」（『新千載集』秋上・四五三・「和歌所歌合に、海辺月を」・後鳥羽院）

江月

一四三 漕こぎかへる堀江ほりえの小舟をぶね心せよさす夕しほに月やどるなり

【合点】為重

【詞書】「江の月」。『千首』題。

【口語訳】堀江を漕いで帰ってくる小舟は気をつけなさいよ。棹さす夕潮には月が宿っているのだから。

【語釈】●堀江―堀割や運河などのように人工的に作った川のこと。ただし「おしてる難波堀江の葦辺には雁寝たるかも霜の降らくに」（『万葉集』秋雜・二二三五）とあるように難波の名所として詠まれる。●心せよ―「心す」の命令形で三句切れ。●さす―舟の縁語で棹をさすの意。●夕しほ―夕方になって満ちてくる潮。

【参考】「堀江漕ぐたななしを舟こぎかへりおなじ人にや恋ひわたりなむ」（『古今集』恋四・七三三・読人しらず）

一四四 三島江みしまえや蘆あしの末葉すゑの露つゆながら落ちおちても水みづに月つきぞうつろふ

【合点】 善成

【詞書】 一四三番歌「江月」題を受ける。

【口語訳】 三島江では蘆の末葉の露となつて光り、落ちても水に月の光が移り映えている。

【語釈】 ●三島江や―撰津国の歌枕。現在の大阪府高槻市南西部にある。「や」は地名を提示する助詞。●うつろふ―「うつろふ」は「移る」の意と「映る」の意とを掛ける。月の光が移りゆき蘆の葉の露を光らせながら三島江の水面に落ち移つて映えている様子。

【参考】 「月影をそれかとばかり三島江のたまえの水はこほりしにけり」〔『明日香井集』六〇四〕

渡月

一四五 里人さとびとや今宵こよひの月つきにあくがれて宇治うぢの渡りわたの舟ふねよばふらむ

【合点】 善成

【詞書】 「渡りの月」。

【口語訳】 里にいる人は今宵の月に心ひかれて宇治の渡りで舟を呼んでいるのだろう。

【語釈】 ●里人―宇治の里人。●今宵の月―配列から見て八月十五夜を詠んだものと考え。●あくがれて―心ひかれて。【補説】 参照。●宇治の渡り―「宇治」は山城国の歌枕。【補説】 参照。●舟よばふらむ―舟を呼ぶ。

【補説】 参照。

【参考】 「宇治川は淀瀬なからし網代人舟呼ばふ声をちこち聞こゆ」〔『万葉集』卷七・一一三五・「山背にして作りき」〕、

「宇治川の川瀬も見えぬ夕霧に槇の島人舟よばふなり」(『金葉集』二度本・秋・二四〇・「河霧をよめる」・藤原基光)
 【補説】宇治は霧の名所であり、「今宵の月に」憧れるものの、【参考】『金葉集』歌のように月の光が霧に紛れ、舟を呼ぶ声という聴覚を頼りにしているという。

八月十五夜、人々来(たり)て、題を探りて歌よみ侍りしに、むらさめ村雨の後、月いとくまなく侍りしに、
 河月といふ事を

一四六 堀川の瀬々にやどれる月かげもふたたびすめる村雨の空

【合点】なし。

【詞書】八月十五夜に人々がやって来て探題歌会を行った折、村雨が降った後、月が非常に澄んでいたので、「河月」という題でよみました。「河の月」は『千首』題。

【口語訳】堀川の瀬々に宿っている月の光が、村雨の止んだ後も再び澄んでそこに住んでいる村雨の空に。

【語釈】●堀川―京都市の市街地中央部を南北に流れる川。平安京造営に際して開かれた。●ふたたびすめる―「ふたたび」は【参考】に示した円融帝が二度の内裏焼亡の際に堀河院仮御所としたことを踏まえる。「すめる」は「(月が)澄む」と「(帝が)住む」とを掛ける。●村雨の空―村雨が降り出す空。ここでは詞書にあるように村雨の後に澄んだ月が出たことを踏まえる。

【参考】「水上にさだめてければ君が代にふたたびすめる堀川の水」(『詞花集』雑下・三八五・「円融院御時、堀河院にふたたび行幸せさせ給けるによめる」・曾禰好忠)

おなじ心を

一四七 幾瀬をかまだ夜深きに過ぎぬらん月に出（で）ぬる淀の河舟

【合点】 善成

【詞書】「おなじ題の心をよみました」。一四六番歌「河月」題を受ける。同日の探題であったかは不明。

【口語訳】いくつの瀬を、まだ夜も深いのに過ぎてきたのだろうか。月と共に舟出した淀の川舟は。

【語釈】●幾瀬—いくつかの浅瀬。●まだ夜深きに—まだ夜が明け果てない時間帯をいう。【参考】忠見歌の第五句を踏まえる。●淀の河舟—山城国の歌枕。【参考】忠見歌の詞書にある淀の渡りの屏風絵を想起させる。

【参考】「いづ方に鳴きてゆくらむ郭公淀の渡りのまだ夜深きに」（『拾遺集』夏・一一三・「天曆御時御屏風に、淀の渡りする人かける所に」・壬生忠見）

一四八 旅寝する月も秋津の川の瀬にこほりをむすぶ波枕かな

【合点】 良基

【詞書】一四六番歌「河月」題を受ける。

【口語訳】旅寝をしていると秋津の川の瀬に月の光が差し込んで、波枕もまるで氷を結んでいるかのようだ。

【語釈】●秋津の川の瀬—大和国の歌枕。「み吉野の秋津の川の万代に絶ゆることなくまたかへり見む」（『万葉集』雑・九一一）より吉野川のことを「秋津の川」とするかとされる。●こほりをむすぶ—月光のきらめきが冷たく射すようであり氷のようであるという。●波枕—浪を枕にするという水辺の旅寝を表すが、ここでは枕のような波と解したい。その波枕が月の光によって氷のように固まって見える。「枕」は旅の縁語。

【参考】「絶え絶えの浮き寝の水に結ぶ夜は氷も浪の枕をぞする」(『壬二集』一六三・冬)

松間夜月

一四九 雲ならぬおのが木(の)間もうちなびき月影もれと松風ぞ吹く

【合点】なし。

【詞書】「松の間の夜の月」。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「松の木のまよりもりくる月の景気をよむべし。夜の字たゞむすばれたるばかりなり。(略)」とある。

【口語訳】雲ではなく、松の木の間からも靡き、月の光よ、漏れよ、と言わんばかりに松風が吹いているよ。

【語釈】●雲ならぬ―月の光が雲から漏れるのではなく。●おのが木の間もうちなびき―「おのが木の間」は歌題の「松間」を詠んでいる。松の木の隙間から風に吹かれて月の光をまるで靡かせているようだと詠む。●月影もれ―雲からではなく松の木の間から月の光が漏れるように。「もれ」は「漏る」の命令形。月影を詠むことで「夜」は題詠でいうところの「必ずしも詠まざる文字」となる。●松風ぞ吹く―松風が月の光を漏らすように吹いている様子。

【参考】「雲ならぬ涙もはらへ秋の風こよひばかりの月をだにみん」(『拾玉集』「月前恋」・四二二)

一五〇 音だにも心ぞすめるよもすがらもる月みがく軒の松風

【合点】善成

【詞書】一四九番歌「松間夜月」題を受ける。

【口語訳】 軒の松に吹く風は、これによつて奏でられた音を聴いただけでもずっと心が澄んでいる。さらに夜通し、松の枝から漏れる月の光を磨いている。

【語釈】 ●音だにも―松を吹く風の音。松風は琴の音を表す。なお【補説】参照。●心ぞすめる―強意の係助詞「ぞ」、「澄む」の已然形「澄め」にある状態が起こつた時から継続している状態化辞「り」の連体形で係り結びとなり、二句切れ。音を聴いた時からずっと心が澄んでいる。

【参考】「あまつ風氷を渡る冬の夜のをとめの袖をみがく月影」（『新勅撰集』雑一・一一一・式子内親王）

【補説】 式子内親王歌のように、月影が氷や袖を磨くとする詠歌は新古今時代に多く見られるが、当該歌は松風が月の光を磨くとする点に特徴がある。

以下、『源経氏歌集』四季部注釈稿（下）に続く。

日本大学法学部機関誌執筆要領

令和3年11月18日 機関誌編集委員会決定
令和3年12月15日 執行部会議承認
令和3年12月16日 教授会報告
令和4年4月1日 施行

1. 本要領の目的

本要領は、日本大学法学部機関誌編集委員会（以下「編集委員会」という）にかかる機関誌に投稿する際の基本的手順について定めるものである。

2. 投稿資格者

- (1) 法学部、法学研究科および法務研究科の専任教員、名誉教授および定年退職した元専任教員
- (2) 以下の者については、編集委員会の審議を経て単著の投稿を認めることがある。なお、投稿に際しては、法学部専任教員の推薦状を必要とする。
 - ① 法学部非常勤講師
 - ② 法学部客員教員
 - ③ 法学部以外の日本大学専任教員
 - ④ 法学部付置研究所研究員および法学部所属の日本大学研究員
 - ⑤ 法学部校友および法学部関係者で研究業績が認められる者
- (3) 学外の研究者は、法学部専任教員の投稿の共著者となることができる。
- (4) 大学院法学研究科博士後期課程学生は、指導教員の許可を得て『日本法学』に「判例研究」を投稿することができる。
- (5) 前4項の規定にかかわらず、退職記念号および追悼論文集については、別の定めによる。

3. 研究倫理の遵守と権利保護

- (1) 投稿原稿は未発表のものに限る。他誌との二重投稿は認めない。また注釈なく自己の既発表著作と重複する記述をすることは認められない。
- (2) 剽窃、捏造、改ざん等の研究不正を行ってはならない。また投稿原稿については、著作者が適正に表示されていなければならない。
- (3) 研究・調査対象に関する権利保護（資料の使用許諾や個人情報保護に関する同意等）、および翻訳に関する権利について、必要な手続きを投稿前に完了していなければならない。
- (4) 利益相反に関する倫理を遵守するとともに、利益相反情報を申告しなければならない。
- (5) 機関誌に掲載された著作物の著作権のうち、複製権および公衆送信権を日本大学法学部に譲渡する。ただし、著者自身による複製権および公衆送信権の行使を妨げない。

4. 原稿種別

投稿は以下の種別で受け付ける。

- (1) 論説
- (2) 研究ノート
- (3) 判例研究（『日本法学』のみ）
- (4) 特別講演
- (5) 翻訳
- (6) 資料
- (7) 書評
- (8) 雑報

5. 原稿の作成

- (1) 原稿は、A4用紙に適当な文字数で打ち出す。
- (2) 分量の上限は、文字数で概ね22,000字（刷り上がり約25頁）とする。それを超えるものについては、原則として分割して掲載する。ただし、編集委員会は、他の掲載原稿のページ数を勘案し、その上限の変更を認めることができる。なお半面1ページ大の図表1枚に付き900字を原稿文字数に含めるものとする。
- (3) 連載を前提とする長大な原稿についても、完結分までの完全原稿を投稿するものとする。
- (4) 表題と氏名には、和文表記および欧文表記を併記する。
- (5) 注、参考文献の表記法は、当該分野の慣例に従うものとする。

6. 原稿の提出

- (1) 原稿は、投稿票、要旨（800字程度）と合わせ、デジタルデータで研究事務課に提出する。
デジタルデータは、原則として電子メールの添付ファイルで研究事務課宛に送付する。
- (2) 原則として、投稿締切日を過ぎた原稿は受け付けない。
- (3) 原稿提出後の原稿の差し替えはできない。

7. 審査

別に定める「日本大学法学部機関誌審査要領」に則って行う。

8. 校正

- (1) 執筆者による校正は、原則再校までとする。加筆、訂正は最小限とし、特に再校時に頁数が変わるような加筆や削除は避ける。再校返却の際は、タイトル頁に「校了（または責了）」と明記する。

- (2) 校正は1週間程度で返却しなければならない。著しい返却の遅滞は、次号掲載になることもありうる。

以 上

- 本誌に掲載の全ての論文につきましては、以下の Web サイトで PDF を電子公開しております。

日本大学法学部ホームページ (<https://www.law.nihon-u.ac.jp/>)

- 本誌の受入れに関しまして、送付先（住所・宛先等）の変更や受入辞退等がございましたら、以下まで御連絡ください。

<連絡先部署> 日本大学法学部研究事務課

（住 所） 〒 101-8375 東京都千代田区神田三崎町 2-3-1

（T E L） 03-5275-8510

（F A X） 03-5275-8537

（E-mail） kenjimu.law@nihon-u.ac.jp

執筆者紹介（掲載順）

黒 滝 真理子 日本大学教授 鹿 野 しのぶ 日本大学非常勤講師
石 橋 正 孝 日本大学教授

機関誌編集委員会

委員長	柳 瀬	昇	委員	高 畑 英一郎
副委員長	竹 本 亨	亨	委員	友 岡 史 仁
副委員長	小 野 美 典	典	委員	中 山 明 広彦
委員	石 橋 正 孝	孝	委員	野 村 和 彦
委員	大 岡 聡 也	聡	委員	松 島 雪 江直
委員	大久保 拓 也	拓	委員	山 本 貴 弘
委員	黒 滝 真理子	真理子	委員	野 中 西 貴 一
委員	小 林 聡 明	聡	委員	前 嵩 西 琴 久
委員	佐 藤 英 也	英	委員	生 垣 野 久
委員	杉 本 竜 也	竜	委員	大 野 久 敏

桜 文 論 叢 第114巻（非売品）

令和8年2月15日印刷
令和8年2月25日発行

発 行 者 小 田 司

発 行 所 日 本 大 学 法 学 部
機 関 誌 編 集 委 員 会
東 京 都 千 代 田 区 神 田 三 崎 町 2-3-1
電 話 03（5275）8510 番

印 刷 所 株 式 会 社 メ デ ィ オ
東 京 都 千 代 田 区 神 田 猿 樂 町 2-1-14 A&Xビル
電 話 03（3296）8088 番

ŌMON RONSŌ

Vol. 114, February 2026

CONTENTS

— ARTICLES —

- KUROTAKI Mariko*, Semantic Differences Between Semi-Modals and Modal Auxiliaries: A Grammaticalization Perspective 1
- ISHIBASHI Masataka*, “Realism” in French Renaissance Prose Narratives: The Spatial Descriptions of Nicolas de Troyes 21

— NOTE —

- SHIKANO Shinobu*, An Annotation of the Four Seasons Part of *Minamoto Tsuneuji Kashu* 92